

源氏物語評釈

末摘花

六

第六帖 末摘花 評釈

旧注歌并詞をもて為巻名。詞云「猶かのすゑつむ花、にはひやかにさし出たり」。歌に「なつかしき色ともなしになにに此末摘花を袖にふれけん」。此巻は、常陸宮の御むすめ末摘花の御事をかきたるゆゑの名也。新此姫君は故常陸宮の御むすめにて、御鼻のあかきによりて末摘花にたとへて、詞にもしかの給へり。そは万葉の「紅の末摘花の色云々」てふ歌より出たる詞にて、紅花は莖立たる上に房あり、その房の末に花はかつがつ咲出るを、手して摘とる故に末つむ花といふ。

玉源氏君十八の春より十九の正月まで也。或人問、夕顔上のうせられしは去年の秋なるに、此巻のはじめに「思へども、猶あかざりし夕顔の、露におくれしほどの心ちを、とし月ふれとおぼしわすれず」とあり。秋より明年の春までの事を「年月ふれど」とはいかが。答、さる例多し。胡蝶巻に、玉葛君は去年の冬はじめて源氏の御方にわたり給へるに、その又の年の春の源氏君の詞に「かく年へぬるむつまじさに」と見え、蜻蛉巻に、去年の夏よりの事を今年の夏の詞に「年ごろ」と見え、浮舟巻にも、秋より又の年の春までの事を「としごろ」と有たくひ也。

巻名の事、諸抄のごとし。但、旧注にこの巻を「横豎をかねたる并」といはれしは、いかが也。そのよしは、空蟬巻の首に委しく論らへるのごとし。かれ今は、并の事どもはしひてかかはらず、此巻を以て第六帖としてかぞへたり。次々なるも皆しかり。さて巻の名の事は、惣論にもいへるが如く、ただよりくるにしたがひて名けられたる物と見えて、巻ごとししひてこちこちしき理を思はれたる物とは見えざれども、又おのづからいささかつ心せられたる物とは見えたり。此巻は、紅の末摘

る。これこの作りぬしの用意のいみじき所也といふべし。たいふの命婦が媒するさまの、いとほやかに心かろきなどは、宮つかへするもののがさなくうたてき情をいひあらはしたるなれど、其中にさすがに末摘花君のことをたすけあはれひたるさまの見えたるなども、皆さる用意也。此すぢはこの人々のみにはあらず、いづれの人のうへにも皆さるようい有。よくよく心とどめて見るべし。抑作り物語は、よさまにいはんとては、よき事の限をとりぐしたるさまにいひ、あしき人の上とては、あしき事の限を書あらはすが、やまともろこしなべての作り物語の常なるを、此つくりぬしは、さるさかひをよく見あきらめて、今一きは用意せられたるなど、此物語はさらに作り物語と聞えぬなり。さるは、世中にある人々のうへを見るに、いかならん、あしき人にも又其中にはさすがによき心しわざもまじり、よき人なればとて、露のあやまちなからんは、さらにある事なきが常にて、もろこしさまの理屈つめとかいふらんとすぢの人は、たえて世の中にはなきもの也。かかることわりをよく思ひしらん人は、作りぬしのさえのただならぬをしるべくなん。こはついでにいふのみ也。

○頭中将のしたひきて立聞し給へるは、かの正副の法にて対へていどませたるにて、中務の君の頭中将をいとひて源氏君のたまさかなる御けしきになびきたるも、其ちやう也。此すぢ、紅葉賀にいたりて源内侍のいどみにいたりて極れり。さてかしくこにかくいどみ給ふ頭中将の心をもいひあらはされたり。心をつくすべし。さて頭中将にいどみあひて、いよいよ末摘花をゆかしく思ひていひより給へるに、いとくちをしき人なりければいたうはぢらひ給へるは、後に頭中将の、玉かづらの君の事をうらやみて近江の君をしひてたづねとり給ひて、さがなきにこうじ給へるを照対にて、とりどりにそのをかしみをあらはされたり。先よく心にと

花によりて名けられたるは上の若紫と相對へたる物にて、巻中にて第一にめでたき人を、いともいともわろかめる人と反對にせられたるものと見ゆ。さるは此次の巻は紅葉賀と花宴と對へ、葵と榊と對へられたるにて、さる事とはしらるる也。さて次々の巻どもも、大かたはさばかりの心はせられたりと見ゆるが多けれど、又悉く然るにもあらざれば、みながらさやうにもいひがたけれど、作りぬしの心ありげに見ゆる名どもは、次々の巻にも注しつべし。見ん人、大かたはは心得おくべき也。

此巻は、若紫の反對に、いと古めきたる常陸宮の姫君の事をいはんとて、わびしくわろき事のかぎりをあつめて語るを主としたる事はいふもさらなる中に、発端の詞をば、かの夕顔のなつかしかりしを思し忘れず、いかでさるむぐらの門にあはれる人のあれかしと、しひてもとめ給ふ物好の心より、思ひの外にくちをしき人を引出きて、わづらひ給へるよしに書なされたる反復の筆、いとめでたし。されば、初にさる事をしひてもとめ給ふよしをことわりおきて、大輔の命婦を引出、さておぼろ月夜のかしきにあれたる所にゐてゆかれて琴きき給ひ、又八月廿よるまたるる月の心もとなきよにゆきて逢給ひ、又えならず身にしむべき雪の朝に立出給ふなど、いと心ふかくあはれるけしきに書もてゆかれたるは、後にさうじみのかたちを見、物のわびしくふつつかなるを見あらはし、肝をけしてあきれ給はん為の抑揚なるべし。此すぢに心とどめて見るべき也。雪の中にとひ給へるくだりは、かのわびしくむつかしく、ふつつかにうるさきすぢを、かぞへたてて書たるにて、末摘花君のさまのむねとある所なれば、心とどめて見るべし。其中に、古代の礼儀を失はざると、さうじみのわらひて心うつくしくけだかきと、かたちに髪めてたきをいはれたるなん、わろき中にとり所ある事を残したるなるべき。かくてぞ、あながちなる作り物語めかずして、さもあるべく聞ゆな

めおきてよむべし。

○末摘花君の御めのとこ、侍従といふいとほやかなるわかうどを引出て、さうじみの御かはりに歌などよみたるさまにかかれたるは、はじめ思ひ給ひしには似もやらて、後に此人あらずてくちをしくわびしき事のかぎりをつくして見せんとの反覆抑揚なるべし。かくて雪ふる夜に源氏君のひそかにかいまみし給ふ所に、わびしき事のかぎりを書きつくして見せられたるは、すべてをかしく戯れくつがへりたる物から、げにかく衰へし人の家のさまをめの前に見るがごとく写し出られたり。其中にも常陸宮のおきて正しく住なし給ひしなごりありて、凡丁などいたくそこなはれたれど、年へにける立どかはらず、おしやりなどみだれねば、といひ、御だいひそくやうの物もろこしの物なれど、といひ、しびらひきゆひつけたる、さすがにくしおしたれて、といへる類、みな其すぢをあらはしたる也。抑常陸宮は、古代の礼儀正しくしてかたくななるまでおはしければ、ひたすら世にもあひ給はでうせ給へるなるべき事、言の外にほひて聞えたるは、世の中の有さまかならずしかにて、今の世も同じく、さる人の時にあへるは稀なる事を思はせたるにも有べし。さて又、かくばかり貴き親王たちの、いかにおとろへ給へればとてかう貧しくなり給はん事は、今世にしては心得がたき事なれど、もろこしさまの郡県の制度をうつし給へる世のさまは、時にあはぬ人は貴き御かたもみなかうやうに成ゆき給へりし事、巻首の惣論にいへる条に考へ合せて、よくよく心得べき也。

○源氏君の御とのゐ所に命婦が衣篋をもてきたるくだりは、かの末摘花を見給ひたる余波にて、かたくなに心おくれたるさまをあやどりたるはいふも更なる中に、さすがにこだいの礼儀残りて、当世に打あはずおくれたるすぢをしたにははせたり。さて紫上の事を末にいへるは、かの

若紫に此紅の未摘花をむかへたる反對の法を引、すべてとぢめたるにて、いとめでたし。さて紅梅の花より又かの未つむ花の事を思ひ出給へるさまにいひて、「かかる人々の未々、いかなりけん」とおぼめきてとどめられたる、殊にめでたし。かくいひ置て、又蓬生の一巻を書て未を結められたるなど、深く心したる物としらる。猶かの蓬生巻にいへるを見てしるべし。

思へども云々

〔花〕此巻は、夕顔の巻につづけて発端の詞をかけり。若紫の巻は、三月に北山へわらはやみまじなひに出給へるより初てかけり。此巻は、若紫よりさきの事をいへる故に、夕顔巻にはつづけて書る也。信明集（しんめいしゅう）は、くれつつ梢々のうつるども露におくれし秋はわすれじ。

〔細〕凡「思へども」と歌の五文字におくは、かならず「思へども思へども」と深切に思ふ心のあるよし也。古今「おもへども身をしわけねば」の歌も、「思へども思へども」とかさねて思ふ心のある也。此末摘などに耳とどめ給ふも、夕顔上にわかれて後、又さやうなる人に、もしやまた逢見んの心也。

〔釈〕「露におくれし」とは、「露のはかなくきゆるにおくれし」といふ意にて、夕顔上のうせ給へるにおくれ給ひしをいひなしたる也。

ここもかしこも

〔弄〕葵上、六条御息所などの体也。

〔釈〕大かたあひ給ふかたがたを、ひろくさしていへる也。けしきばみ又心ふかきさまを、まけじ劣らじとつくるひ給ふるを「いどましき」とはいへる也。

けちかくなつかしかりし

〔釈〕ここより夕顔上の事也。いづかたもけしきばみ心ふかくなつくるひ給ひて打とけがたき故に、けちかくなつかしき夕顔上を恋しうおぼえ給ふ也。

いかでことごとしき

〔孟〕夕がほの心つきのやうなる人もがな、と也。

〔釈〕「おぼえはなく」の下にともといふ詞ありしを、おとせるなるべし。なくてはとどのひがたし。「おぼえ」は世のおもはくの事にて、ここは種姓などをいへり。

さてもやとおほしよる云々

〔釈〕御耳とまる中に、さてもや見んと思ひより給ふほどの所々へは、一くだりの文をも遣はし給ふに、もてはなれたるは大かたあるまじ、と地より評したる也。「めなれたる」とは、めづらしげなき意也。

つれなう心づよきは

〔釈〕其中に又つれなく心づよくてなびかぬ女は、まめやかさ余りてなきけおくれ、物の分際もしらぬやうなるを、実にさやうかで見れば、さて

ばかりも過しはず、後にはつれなき心のなごりもなくくづれて、何ともなきただ人の妻にさだまりなどするもあれば、いひさしにしてやみ給へるも多し、といふ也。此段いたく書かすめたる筆つきにて、ほのかにまぎらはし、よくよく心を得てよむべし。「物のほどしらぬ」とは、源氏君の尊き分際をもしらぬやうに、むげにつれなくするといふ意なり。「あまり」といふ詞は、もしくは上の句につけて、「まめやかさなど余り」とよむべきかとも思へど、なほもとのままなるべし。岷江入楚の箋注、ひがことおほし。

かのうつつせみを云々

〔評〕この一段は、ははききの巻よりこなた、をりをりに綻ホトコロはしたる脈スヂをあらはしたるはいふもさらなり。此下に、末摘花君にくらべてうらうへに評し結ばんとての伏案也。心をつくべし。

をぎの葉も

〔釈〕軒端萩の事にて、例の副たる文法也。「風のたより」「おどろかし」などいづれも萩の縁語なり。

ほかげのみだれたりしさまは

〔評〕灯の影に暮うつを見給ひしを、萩の穂によそへてかける也。またさやうにても

おほかたなごりなき云々

〔評〕此詞は箋にもいはれたるがごとく、源氏君の性質を評したる中に、夕顔上のかはりにてあながちにむぐらの門をたづね給ひ、つひに末摘花君を引出べき伏案とられたり。いと巧也。

左衛門のめのと

〔細〕源の乳母也。大弐の乳母につきては、此左衛門のめのを源は大切にし給ふ也。

たいふの命婦

〔釈〕兵部大輔の女の、命婦になりたるなれば、大輔の命婦といふ也。

おもへども、なほあかざりし夕がほの、露におくれしほどの心ちを、トキ

年月ふれどおぼしわすれず、（△源ハ）ここかしこも、うちとけぬかぎりの、キヨユルサヌ

けしきばみ心ふかきかたの御いどましきに、（△源ハ）けぢかくなつかしかり方

しあはれに、（△夕顔乙）にる物なうこひしくおぼえ給ふ。（△源ハ）いかでことごとしき似

おぼえはなく、いとらうたげならん人の、つつましき事なからん、（△夕顔乙）

みつけてしがな、（△夕顔乙）とこりずまにおぼしわたれば、すこしゆゑづきてカハユラシゲ

聞ゆるわたりは、御みまとまり給はぬくまなきに、（△夕顔乙）さてもやとおほモノガクシスルコト

しひよるばかりのけはひあるあたりにこそは、ひとくだりをもほの（△見レ）

めかし給ふめるに、なびき聞えずもてはなれたるは、（△見レ）をさをさある耳留

まじぎぞ、いとめなれたるや。（△見レ）つれなう心づよきは、たとしへなう（△見レ）

てもすぐしはず、なごりなくくづほれて、なほなほしきかたに（△夕顔乙）

のうつつせみを、もののをりをりには、ねたうおほしいづ。萩の葉も、（△源ハ）

さりぬべき風のたよりある時は、おどろかし給ふをりもあるべし。（△源ハ）

ほかげのみだれたりしさまは、（△源ハ）またさやうにても見まほしくおぼす。（△源ハ）

おほかたなごりなきものわすれをぞ、えし給はざりける』左衛門の（△源ハ）

めのととて、大弐のあま君のさしつきにおぼいたるがむすめ、たい（△源ハ）

うちにならふ

〔釈〕此語の脈、「うちにさふらふ兵部大輔」といふやうに聞ゆれども、さにはあらず。たいふの命婦とて内にさふらふは、わかんどほりの兵部大輔なるが女、といふ意也。そのよしは下文にてしられたり。

わかんどほり

〔和〕たとへば王孫にてある人の兵部大輔に成たるをいふ也。

〔孟〕王孫にて姓を不賜平人也。わかんどほりの事、是もむかしは秘事にいひし事也。

〔拾〕百済王禪広の末を百済王某乙といひけるを、略して王といひければ、王家といふべし。さてそれを音便に「わかん」ともいふべきは、催馬楽に「わいへん」などいふ例也。「どほり」は、すぢの心にて、王家の裔といふ心などにや。延喜式に中納言真世王の末を王氏といへり。又桓武天皇の御裔にもいへり。いづれの親王にもあれ、氏を賜はらであるほどは、皆王氏といふにや。王氏を王家といふべし。

〔釈〕拾遺の説のごとく、王家のすぢといふ義なるべし。ただ王の裔にて氏賜はらぬ人と心得べし。百済王のことはここに用なき注なり。

兵部大輔

〔釈〕この人常陸宮の御子にて、末摘花君の御兄のごとく聞ゆるよし、玉小櫛に委く考へられたり。長ければ余釈に挙つ。

父君のもとをさとにて

〔玉〕これを父宮といへる説は、いみじきひがこと也。拾遺にわきまへたるがごとし。又父宮を父君といふことなし。宮なれば「宮」とか「み」とかいふ例なるをや。

〔拾〕上にいへる兵部大輔なり云々。余釈一挙つ。

ひたちのみ

〔釈〕親王の常陸の太守に任せられたるをいふ。

かたらひ人

〔拾〕琴は声ある物なれば「かたらひ人」といふ。「人」とは、万葉には雁を「遠つ人」、郭公をも「遠つ人」、後撰にも郭公を「まつ人を誰ならなくに」とよむ、此物語の末には猫をも人といひつれば、万にわたりに似つきたる所にはいふべき也。

みつのも

〔河〕今日北窓下、自向何所_レ為、欣然得_二三友_一、三友者_為誰、琴罷_レ輒_レ拳

〔酒〕酒罷_レ輒_レ吟_レ詩、三友_通相引、循環無_二止時_一、一彈_レ慨_二中心_一、一詠_レ暢_二四支_一、猶恐_レ中有_レ問、以_レ醉_レ弥_レ繼_レ之。白氏文集

いま一くさやうたてあらん

〔細〕河海「詩の事と云々」。但酒の事にて可_レ然歟。詩は女の学ばんもつきなからざる也。

〔拾〕細流の説然るべし云々。下略

〔釈〕拾遺にいへることく、詩もあまりに好まはなつかしからざるべし。然れども、ここは酒なるべし。さてこの意は、琴をかたらひ人といひなしたる故に、げに琴詩酒を三の友といへればさもあるべし、されど酒をのまんはうたてあらん、と戯れ給へる意をつづめていへる也。諸抄無用の事多くして、此意をとかれざるはいかにぞや。さらでは聞えぬこと也。

いたうけしきばましや

〔釈〕俗言に亭主ブリタルといふがごとき意にて、末摘花の琴のことを命婦がごどわるを、しかけしきだちて亭主ぶるほどのことかは、といふ意と聞えたり。

まかてよ

〔釈〕命婦も内裏を退出て案内せよとの給ふ也。

父のたいふの君は云々

〔釈〕此人の事、余釈に玉小櫛を引たるがごとし。故に君といへるなるべし。「ここ」とは常陸宮をいふ。まま母は大輔君と共に外にすむにや、又このひたちの宮の内におきて時々かよふにや、今少し詳ならず。

ままははのあたりは

〔花〕兵部大輔が左衛門乳母の後にむかへたる妻は、命婦がためにはまま母なり。

〔新〕「住もつかず」とは、父の家の事也。上には先有べきすぢをいふ故に、「父君のもとを里にて行かよふ」と書たり。ここにはさはあれど、父の方にはまま母あればえすもつかで、内より退る時多くは末摘花の方へゆくをいへり。

もの音すむべき夜の

〔湖〕麗夜の琴などの音の澄わたるべき夜にもあらぬに、と申す也。

〔万〕命婦がめいわくしたるとの詞也。

ふの命婦とて、うちにならふ

わかんどほりの、兵部のたいふな

るがむすめなりけり。いといたう色このめるわかうどにてありける

を、君もめしつかひなどし給ふ。はははちくぜんのかみのめにて、

くだりにければ、ちち君のもとをさとにてゆきかよふ。こひたちの

みこのすゑにまうけて、いみじうかしづき給ひし御むすめ、心ぼそ

くてのこりみ給へるを、物のついでにかたり聞えければ、あはれの

ことや、とてとひきき給ふ。心ばへかたちなど、ふかきかたはえし

り侍らず。かいひそめ人うとうもてなし給へば、さべきよひぬなど、

ものごしにてぞかたらひ侍る。きんをぞなつかしきかたらひ人と思

ひ給へる、と聞ゆれば、みつのもにて、いまひとくさやうたてあ

らん、とて、我にきかせよ。ちちみこのさやうのいとよしづきて

物し給ひければ、おしなべての手づかひにはあらじとおもふ、とか

たらひ給ふ。さやうに聞しめすばかりには侍らずやあらん、といへ

ば、いたうけしきばましや。このごろのおぼろ月夜に、しのびて物

せん。まかてよ、との給へば、わづらはしとおもへど、うちわたり

かにぞすみける。ここには時々ぞかよひける。命婦はままははのあ

たりはすみもつかず、姫君の御あたりをむつびて、ここにはくるな

りけり。の給ひしもしるく、いざよひの月をかしきほどにおはした

り。いとかたはらいたきわざかな。もののねすむべき夜のさまにも

猶あなたにわたりて

〔潮〕末摘のおはするかたへ行て、琴を所望つかまつれ、と也。

うちとけたるすみかに

〔細〕内々の方也。命婦が我局などなるべし。

〔万〕命婦常に参りてある方に置まゐらせられたれば、「忝し」とはいへり。

〔釈〕「うしろめたう」とは、かくし置参らせたる故に人の見つけんかと気にかかる意也。

御ことの音いかにまさり侍らんと

〔釈〕おぼろ月のをかしきにあはせて、琴の音の常よりはいかばかりまさらんと思はるる夜のけしきにこそはれて参りし、といふ也。

心あわたたしき出入に

〔釈〕常に参れど、いつもいつも心いそがしき出入にて、え承らぬは残念也、といふ意也。湖月・万水などに「内裏の御奉公に隙なきに」といへるは、少したがへり。

あはれは聞しる人こそはあなれ

〔釈〕此語いささか心得がたし。異本を挙て余釈にいへるを見べし。今は一本によりていはん。命婦が詞に、「御ことのねいかにまさり侍ん、と思ひ給へらるる夜のけはひに」といふをうけて、「さるをりふしの物のあはれは、心ありて聞しる人こそはあなれ、我らごときものしるべきことかは、まして禁中に行かよふ命婦などの聞ばかりは、いかでかえひかん」といふ意なるべし。旧注のごとくにては、次の詞に続きがたくして、いたくほこりに聞ゆ。さはあるまじき事也。

めしよするもあいなう

〔釈〕琴をめしよせ給ふを見て、命婦が何となく打つけに心づかひするを、「あいなう」といへる也。源氏君のいかが聞給はんと、安心のならぬよし也。

ものねがらの

〔新〕手なきにはあらねど、そはいとふかき手ならぬを、もとより琴は音からのよき物なれば、聞にくからぬ也。

さばかりの人の云々

〔釈〕「さばかりの人」は、故父宮なり。「ふるめかしう」とは、古代の行儀正しきをいふ。「所せく」は、かしづく事の余りて所も狭きほどなるをいへり。「おもほし残す事」とは、色々さまざまに物を思ひ出て、思ひといふ思ひに残ることなきをいふ。此詞を心得そこねられたる旧注は、いみじきひがこと也。

むかし物語にも

〔釈〕昔物語の冊子などにも、かやうの所にこそあはれなる事どもはありけれ、と思ひ合せ給ふ也。花鳥に引給へるうつほの俊蔭がむすめなどのこと、げによしありては聞ゆれど、必しも彼にかかはる事にはあらず。ただ昔物語とのみ見てあるべし。

命婦かどあるものにて

〔細〕命婦心しらひして、大かたにひかせまゐらするなり。

くもりがちに侍めり

〔岷〕朧月夜の体をいふ。物の音もゆるびて、すみぬべき夜のさまならずと申す也。

まらうどのことと侍りつる

〔釈〕客人の来んと申つるを、局にあらずは、いとひとりどや思はん。故にかへり侍る也。今に参りてのどやかに承らん、と申て立て、帰りさまに、御格子参らん、と心をつけたるなり。命婦がさま、見るがごとく、聞くがごとし。「のどかにを」のをは助辞なり。

なかなかなるほどにて

〔潮〕あまりに少し聞給へば、かへりてきかぬにおとれるほどにてやみぬることよ、と也。

侍らざめるに、と聞ゆれど、猶あなたにわたりて、ただひとこそも

マア 末ツムノ方ニ ユキ

よほし聞えよ。むなしくてかへらんがねたかるべきを、との給へば、

ザンネンナル

打とけたるすみかにすゑ奉りて、うしろめたうかたじけなしと思へ

住 所 オキ

キヅカハシウ オソレオホイ

ど、しんでんにまゐりたれば、まだかうしもさながら、梅の香をか

寝 殿

格 子 ソノママニ

しきを見いだして物し給ふ。よきをりかなと思ひて、御ことのねい

木ツム

*命婦詞

かにまさり侍らん、とおもひ給へらるるよのけはひに、さそはれ侍

スミマサリ

イモル 夜 ケシキ

りてなん。心あわたたしきいでいりに、えうけ給はらぬこそくちを

* 参り侍ル

出 入

△イツモ

しけれ、といへば、あはれはしる人こそあなれ。ももしきにゆきか

* 末摘花詞

万ものあはれしる人こそあなれ 湖ききしる人こそ

禁 中 カヨ

ふ人のきくばかりやは、とてめしよするもあいなう、いかがきき給

* 参り侍ル

△フルベキ △琴ヲ

ドウヤララカシウ △源ノ

はんとむねつぶる。ほのかにかきならし給ふ、をかしう聞ゆ。なに

末摘花

オモシロク

ばかりふかきてならねどもののねがらのすぢことなる物なれば、き

手

ワケノチガウタ

△サノミ

きにくくもおぼされず。いといたうあれわたりてさびしき所に、さ

源 心

荒

Ⓜ

ばかりの人の、ふるめかしう、所せくかしづきすゑたりけんなごり

故父宮

Ⓜギヤウサンニ

居

余 光

なく、いかにおもほしのこす事なからん。かやうの所にこそは、む

△末ツムノシンキニ思ヒタマハヌコトガ

かし物語にもあはれなることども有けれ、など思ひつづけて、もの

やいひよらましとおぼせど、うちつけにやおぼさん、と心はづかし

寄

ソツジ

△末ノ

イハナシ

くて、やすらひ給ふ。命婦かどあるものにて、いたうみみならさせ

踏 踏

オ

耳 馴

奉らじと思ひければ、くもりがちにはべめり。まらうどのことと侍

* 命婦詞

△我方ノ客人

*

りつる、いとひがほにもこそ。いま心のどかにを。みかうしまゐり

△居ヌハノ 職

△思フケレ オツツケ ユルヤカ

△承ラン

オロシ

なん、とていたうもそそのかさでかへりたれば、なかなかなるほど

ス スメ ス

* 源詞

ナマナカ

のたまふけしき

【釈】けしき「にて句をきりてよむかた、まづはよろしからんか。さては」をかしと」の下に、はもじなどあらまほし。又「けしきをかしと」とつづけてよむかたにては、けしきは其夜の宮中のけしきと聞ゆ。猶考へてさだむべし。

心にくくてと思へば

【細】命婦が心づかひ也。

【湖師】おくふかくせんと思へるなり。

【釈】心にくきほどにて止んと思ひたる也。

いとかななる有さまに

【釈】あれはてよろづ幽なるありさまに、末摘花のはちらひて消入るさまに居給へば、きのどく也、とことわる也。「かすか」といひ「消る」といふは、縁の語。

にはかに我も人も云々

【釈】ふと出合にてにはかにかたらふは、凡人などの分際にてこそするわざなれ、貴人どちはさはあらず、との心也。旧注わろし。

【余男女】のしのびわざするは、貴人は貴人どち、いやしきものはいやしきものどちにかたらふを、「きはは、きは」といへる也。

さやうのけしきを

【細】此由を申せ、と也。

うへまめにおはしますと

【釈】父帝の、常に源氏君の御事をあまり実体にましますともてなやむやうにの給ふを、命婦が聞てをかく思ふをりもあり、と也。さてかやうの御やつれ姿を、帝のいかでか御らんじつけ給はん、御覽じたらばいかがあらん、など戯れて申す也。上の「また契り給へるかたやあらん」といふをたすけたる余韻なり。

にてもやみぬるかな。物ききわくほどにもあらでねたう、とのたま止 間 分 クラキ ザンネン

ふけしき、をかしとおぼしたり。おなじくはけぢかきほどの立イけはひ 源詞 折 残

せさせよ、との給へど、心にくくてと思へば、いでやいとかな命婦詞 イヤサ

るありさまに思ひきえて、心ぐるしげに物し給ふめるを、うしろめ消 キノドクサウ メイワク

たきさまにやといへば、げにさもあること、にはかにわれも人もう源詞 ナルヤウ △末ノオホサン ナルホドサウモ △ナリ

ちとけて、かたらふべき人のきはは、きはとこそあれ、などあはれ分際 分際

におほさるる人の御ほどなれば、猶さやうのけしきをほのめかせ、末ツム 分際 △末二

とかたらひ給ふ。又ちきり給へるかたやあらん。いとしのびてかへヤクンクシ

り給ふ。うへまめにおはします、ともてなやみ聞えさせ給ふこそ、*命婦詞 帝 △源ノ実体

をかしう思ひ給へらるるをりをり侍れ。かやうの御やつれすがたを、咲 シノビデタチ

いかでかは御覽じつけん、と聞ゆれば、たちかへりうちわらひて、ドウシテ ツケウ

こと人のいはんやうに、とがなあらはされそ。これをあだあだしき*詞 他 啓 顯 コノラキノゴトウハキラシイ

ふるまひといはば、女のありさまくるしからんと給へば、あまり△ハナホナホ *命婦方

いろめいたりとおぼして、をりをりかうの給ふを、はづかしとおも色 トキドキコヲヤウニ

ひて物もいはず。しんでんのかたに、人のけはひきくやうもや、と命婦 末ツム ヤウスキコユル △アル

おぼして、やをらたちいでたまふ。すいがいのただすこしをれのこソット 透 垣 折 残

りたるかくれのかたに、たちより給ふに、もとよりたてるをとこあカ ゲ ハジメカラ 立 在

りけり。たれならん。こころかけたるすきものありけり、とおぼし好色者

て、かげにつきてたちかくれ給へば、とうの中将なりけり。このゆ* 頭 草子地

ふつかた、うちよりもろともにかまかで給ひけるを、やがて大殿にも禁中 イッシヨ カ スグニ

我もゆくかたあれど

●頭中將も忍ひてゆく所あれど也。

あやしき馬にかりぎぬ姿の

●花狩衣姿、上に「内より出給ふ」と有。それにかりきぬすがた、おぼつかなし。

●新中將もゆく方ありと出たれば、さるやつれの料にもたらしたるを、道のいづこにても着たるなるべし。馬も「あやしき」といふは、夕顔巻に惟光が馬を源に奉りしごとく、従者の馬に中將ものりけんかし。ここを疑ふやうにいひし説は、いふにもたらず。ないがしろにて

●新こは中將ならぬさましたるをいふ。かの軒端、荻の衣にいへるとは異也。

ことかたに入給ひぬれば

●岷源の寝殿へこそおはすべきを、さはなくて、命婦の居るかくれの方へおはしたるを、心得ず思ひたるに、其うちに末摘の琴を引給へば、それに聞つて寝殿のすいがきのもとにまだまだたずみ居たるなり。したまつなりけり

●「したまつ」は、心のうちにのみ思ひて待意也。すべてかやうのしたといふ詞は、心の中の事也。引歌まではあらぬ所也。

もろともに云々

●大内山の事、花鳥に委し。仁和寺の西並岡のあたりなるべし、と有。さてこは、大内山の名をかりて禁中の事にいへり。「入るかた見せぬ」とは、源氏君のかくれ給ふをよそへていへり。「いさよひの月」は、上に見えたり。

人の思ひよらぬ事よ

●かやうに跡につきてうかがひ来るなどは、なべての人の思ひもつかぬ事よど、かりにくみながら也。

さとわかぬ云々

●花里わかぬ月のひかりをば見れども、明がたの入さの山までをたづぬる人もなきに、思ひよらぬ事、とにくむ心をそへたり。

●「里わかぬ」とは、いづれの里とはいはず、なべておしる月の影を二、頭中將のいたらぬ隈なくありき給ふの意也。「いるさの山」は、但馬国の名所なるをかりて、只月の入る事によせたり。

かうしたひありかば

●花頭中將の詞也。

隨身からこそ

●花隨身は近衛づかさの身にしたがへてつるるもの也。

●かやうの御しのびありきにも、然るべき御供の人ありてこそ道のほども危げなくたしかなるべけれ。さればいつも某を随へ給ひておくれさせ給はでこそ出給はめとの意也。旧注大和物語を引れたる、例の不用也。かるがるしき事もいできなん

●かくやつれたる御怒ひありきは、軽々しく不都合なる事もや出来ん、といひて諫むる也。さてかく諫め給ふも、すべて皆戯れて諫むるなり。其意を得て読べし。

かうのみ見つけらるるを

●湖師「かうのみ」といふ詞、今はじめての事にあらず、已前にもかやうの事をみつけしならん。此後にも源内侍の事あり。

おもきこうに

●玉「こう」は功にて、わが手がらにおぼす也。碁の劫の事は、さらによしなし。

おのおのちぎれるかたにも

●湖源も頭中將も外にかよふかたあれど、互にされあひて行わかるる事もせず、ひとつ車にのりて帰らるる、と也。

●岷頭中將は馬なりしかは、源の御車なるべし。

雲がくれたる道のほど

●前に「おぼろ月」といひ「くもりがちに侍めり」といへる故に、ここに「雲がくれたる道のほど」といへり。首尾とどのひてめでたし。

よらず、二条院にもあらで、引わかれ給ひけるを、いづちならんと

何方

ただならで、われも行かたあれど、あとにつきてうかがひけり。あ

ユカシウテ

中將

△源乙跡

隨

窺

やしき馬に、かりぎぬすがたのながしるにてきければ、えしり給

△ノリ

狩衣

シドケナキ

△源乙

裏

けるほど、物のねにききついてたてるに、かへりや出給ふ、とした

ウチ

琴

聞

トレテ

△源乙

裏

まつなりけり。君はたれともえ見わき給はで、我としられじ、とぬ

待

分

源

きあしにあゆみのき給ふに、ふとよりて、ふりすてさせ給へるつら

シアシ

歩

退

ツト

△源乙

裏

さに、御おくりつかうまつりつるは、

サ

送

月。とうらむるもねたけれど、此君とみ給ふにすこしをかしうなり

源心

ウチラシ

△源乙

裏

ぬ。人の思ひよらぬことよ、とにくむにくむ、

＊源詞

ツカヌ

＊里わかぬかげをば見れどゆく月のいるさの山を誰かたづぬる。か

＊源

シツカリトシタ

△中將乙

如

やうの御ありきには、ずゐじんからこそ、はかばかしき事もあるべ

イモ

＊随

身

ユエ

シツカリトシタ

△源乙

裏

けるしき事もいできなん、とおしかへしいさめ奉る。かうのみみつ

＊源心

ククリカヘシ

謙

△中將乙

如

けらるるを、ねたしとおぼせど、かのなでしこは、えたづねしらぬを、

クチラシ

△中將乙

△源乙

裏

＊おもきこうに御心のうちにおぼしいづ。おのおのちぎれるかたにも、

＊功

重

あまへてえゆきわかれ給はず、ひとつ車にのりて、月のをかしきほ

ソバヘテ

オモシロイクラ

＊どに雲がくれたる道のほど、笛ふきあはせておほい殿におはしぬ。

＊ニ

人みぬらうに御なほしごもめして

〔細〕狩衣姿なるを直衣に改め給ふ也。

〔評〕人見ぬ廊といへる、忍びたる人のかへれるさま、いとをかし。今くるやうにて

〔孟〕内裡より只今御出のやうにし給ふ也。

こまふえ

〔拾〕和名抄云「兼名苑注云、籥以灼反。今案、所謂高麗用、此字歟。和名古万布江。除吹処、而六孔之笛也。」

〔評〕道のほど、笛ふきあはせてかへり給へる余波に、この一段をとり出たるなり。その中に中務の君の事を挿みたるは、後の巻の伏線としたるにて、さらにめでたし。

御ことめして

〔釈〕この「ごと」は、比巴・箏・琴にかきらず、すべての彈物の事をさして「ごと」といへる也。

うちにも此かたに

〔岷〕この「内にも」は、葵上のおはする方也。この「かた」は、樂のかたに心得たるなり。

〔細〕中務君は葵上に祇候の人也。

わざとびはひげ

〔玉〕拾遺に「琵琶をひくをわざとする也」といへるは、言の本はさる意なれども、用る意はいささか異なり。俗言に、びはをばもつはら精をだしてつねにひけども、といふやうの意也。

頭の君心かけたるを云々

〔細〕中務に頭君の心かけたるを、もてはなれて源へしたがひ奉るを、葵上の母大宮の聞給ひて、この比御けしきよろしからぬ也。わざとびはひけど、かやうの心はへ有てひかぬよし也。「たまさかなる」は、源の事なり。

〔釈〕「すさまじげにて」とは、かく人々の管絃する中に、中務のみ用なる也。「よりふし」は、物によりてふしめに成たる也。

たえて見奉らぬ所に

〔釈〕これより中務君の心をとく也。ここをさりて源氏君を見奉らぬ所にかけはなれゆかんともおもへど、それもさすがに心ぼそくて、猶ここに在て思ひ乱れたり、と也。

ありつるきんのねを

〔釈〕この琴の音につけて、かしのきんのねを思ひ出給ふ也。「ありつる」とは、末摘花の方にて有つる也。

あらましごと

〔釈〕此語は、句をへだてて下の「思ひけり」といふへかかる脈也。点のことく心得べし。さて「あらましごと」とは、末の事を前つかたよりあらかしめ思ひはかるをいふ詞也。俗にいふとはいたく異也。

いとをかしうらうたき人の

〔釈〕もしうつくしき人の、末摘花のごときすまひに在て年月をかさねたらんを、あひ見そめていみじく心にいららば、世のそしりにもあふほどにあるべしなど、頭中将はわれながら思ひ給ふといふ意也。「心ぐるしく」は、ここは人のいたはしげなるを見て、憐のふかくかかる意にかひたる也。

まさにさては

〔玉〕すべて「まさに」といふ詞のつかひざま、物語なるは皆かやう也。漢文に豈といふがごとし。

あやふがりけり

〔釈〕先、源氏君に得られんかと危く思ふよし也。

さやうなるすまひする人は云々

〔岷〕これより源も頭中将も、あまり物思ひしらぬ末摘の心かなといづれも思ひ給ふ也。「中将はまいて心いられしけり」とは、其中に中将は猶いらいらしく思ひ給ふ也云々。

〔釈〕この語脈、点のごとし。かくかすかなるすまひするわび人は、はかなきをりをりの本草の花、又は空のけしきなどによそへても、物のあはれを思ひしりたるさまをとりなしなどして、そのこころざしの傍よりも推量られたるこそ哀ならめ、と也。「とりなし」は、歌などにとりなしてよむ事なるべし。

さきなどもおはせ給はず、しのびて入て、人見ぬらうに御なほしど

先

〔駈〕

もめしてきかへ給ひ、つれなう今くるやうにて、御ふえども吹すさ

もナシ

着

ナノヘンモナク

びておはすれば、おどどれいのききすぐし給はで、こまぶえとり出

給へり。

左大臣

いと上ずにおはすれば、いとおもしろうふき給ふ。御こと

めして、

うちにもこのかたに心得たる人々にひかせ給ふ。中務の君

めして、

葵上ノ方

ヒキモノノ方也

わざとびはひげど、頭の君心かけたるをもてはなれて、ただこの

わざとびは

琵琶

〔註〕

たまさかなる御けしきの、なつかしきをば、えそむき聞えぬに、お

△源ノヲリフシノ

のづからかくれなくて、大宮などもよろしからずおぼしなりたれば、

葵上ノ母君

物おもはしくはしたなきこちして、すさまじげによりふしたり。

物おもはしくはしたなきこちして、

フツガフナ

不用ラシゲ

たえて見たてまつらぬところに、かけはなれなんも、さすがに心ぼ

たえて見たて

△源ノ

去

そくおもひみだれたり。君たちはありつるきんのねをおぼしいでて、

そくおもひ

源 頭中将

あはれげなりつるすまひのさまなども、やうかへてをかしうおもひ

あはれげ

〔哀〕

カハリ オモシロウ

つづけ、あらましごとにいとをかしうらうたき人の、さて年月をか

つづけ、

△申替ハ

ウツクシウ

アノヤウデ

さねあたらん時、みそめていみじう心ぐるしくは、人にももてさわ

さねあたらん

アヒンメテ

△世ニキコエテ

がるばかりや、わが心もさまあしからむなどさへ、中将はおもひけ

がるばかり

マヨ

ハウカ

マデ

り。この君のかうけしきばみありき給ふを、まさにさてはすぐし給

ひてんや、

源氏

キモチアリテ

トウシテ ソノマデハステオキ

ふみなどやり給ふべし。いづれもいづれもかへりこと見え、おほ

ふみなど

クチラシウ

△末ハ

つかなく心やましきに、あまりうたてもあるかな。さやうなるすま

つかなく

ムシヤクシヤスル

ヘンクツニモ

アノヤウ

ひする人は、物思ひしりたるけしき、はかなき本草、空のけしきに

ひする人は、

△ヲ

ナンドモナイ

ひする人は、物思ひしりたるけしき、はかなき本草、空のけしきに

ひする人は、

△ヲ

ナンドモナイ

おもしろとも

【湖】其身いかにおもしろきととも、あまり埋れて返事をもせぬやうなるはあしきと思ふ、と也。是も末摘を心ふかき上臆と心にくく思ふから思へる心也。

れのへだて聞え給はぬ心にて

【細源】頭中将との御あはひ也。

【湖師】これは中将君のみへかけて見るべし。しかしかの返事は

【新】かの哀げなりし所よりの返事でふを、云々と略していひたる也。ころみにかすめたりしこそ

【釈】我は試にかすめいひたりしに、末摘花の返事なきはしたなくて止たり、とどひかけ給ふ也。「うれふれば」とは、わひて訴へいふ意也。いざ見んとしも思はねばにや云々

【新】「いざ」は「いな」にて、問にしからずと答ふる語也。さてもとより見ばやともおもほえぬ心故にや、よし見しども見るとも覺えず、と也。恐らくは見しならんと、頭の思ふべく答へ給へり。されば源には返事せしよと意得てねたむ也。

人わきしけると

【釈】「人わき」とは、俗にワケヘダテといふがごとし。人によりては返事をするならんとねたく思ひ給ふ也。

君はふかうしも云々

【釈】源氏は初よりさまでふかくは思ひ給はぬ事なる上に、末摘花のなさけなきを不興に思ひて止んと思ひ給ひしかど、又頭中将のいひよりけるを聞給ひて、さはあれどつひには詞多くいひなれたる中将のかたにしたがふべし、其後に女がたのしかりがほにて、始よりいひぞめし我を思ひ放ちたらんけしきを見なば残念なるべし、とて命婦をかたらひ給ふ也。思はぬこと

【新】此のは、思はぬこと「なるがうへに」と云ほどの語を略したる也云々。

【釈】「ながら」といふに似たる意のものもし也。

ことおほく云々

【花】ことおほくれんじたるかたに本文。「れんずる」は鍊ずる也。鍊磨するなどいふ心也。うちおかぬ心也。

【釈】かやうの本もありしなるべし。

つけても、とりなしなどして、心ばせおしはからるるをりをりあら

①キマヘハ

んこそ、あはれなるべけれ、おもしととも、いとかうあまりうもれ

ヒツコミ

たらんは、心づきなくわるびたり、と中将はまいて心いられしけり。

キニクハズ△カハツテ

△思ヒテ

キガイライイラ

【*】れのへだて聞え給はぬころにて、しかしかの返事は見給ふや。

イヒコロ

*中將詞

云々

【*】ころみにかすめたりしこそ、はしたなくてやみにしか、とうれふ

フツガフデ

憂

れば、さればよ。いひよりにけるをや、とほほゑまれて、いざみん

源心

コン

*詞

イヤミタイ

としも思はねばにや、見るとしもなし、といらへ給ふを、人わきし

△アランミタ

△末ノキラヒ

ける、とねたう思ふ。君はふかうしもおもほぬことの、かうなさけ

△ナランサンネニ

△サノミ

なきを、すさましく思ひなり給ひにしかど、かうこの中将のいひあ

不用ラシウ

△マズ

りきけるを、ことおほくいひなれたらむかたにぞなびかんかし。し

カリ

△キキ玉ヒゴ言多

シタガハン

デ

たりがほにて、もとのことを思ひはなちたらんけしきこそ、うれは

イテナシ

ハジメカラノ

クチヲ

しかるべけれ、とおぼして、命婦をまめやかにかたらひ給ふ。おほ

シ

真実

つかなうもてはなれたる御けしきなん、いと心うき。すきずきしき

トリアハヌ

ウハキラシイ

かたに、うたがひよせ給ふにこそあらめ。さりともみじかき心はえ

△末ノ

つかはぬ物を。人の心のどやかなることなくて、思はずにのみあ

女

ユルヤカ

案外

ハカリ

るになん、おのづからわがあやまちにもなりぬべき。心のどかにて、

△△

ユルヤカ

おやはらからのもてあつかひうらむるもなう、心やすからん人は、

親兄弟

△△

なかなかなんらうたかるべき、とのたまへば、いでやさやうにをか

カハツテ

カハユ

命婦詞

イヤモウ

しきかたの御へかさやどりには、えしもや、とつきなげにこそみえ

*

アマヤドリ所

カヨヒドコロ

△ナリ玉マジキフニアヒサウ

侍れ。ひとへに物づつみし、ひきいりたるかたはしも、ありがたう

一編

ハチ

ヒツコミ

方

御かさやどりに

【河】いもが門、せなが門、ゆきすぎかねてや、わがゆかば、ひぢがさの、ひぢがさの、あめもやふらなん、してたをさ、あまやどり、かさやどり、やどりてまからん、してたをさ 催馬楽妹之門

【湖源】の好み給ふ風流なるかたの立より所にはあるまじく、只物づつみし給ふかたの好みにはあひかなひ給はん、と申す也。

【釈】催馬楽の詞を、やがて立より給ふべき所にとりなしていへり。

ものし給ふ人になん、とみるありさまかたり聞ゆ。源心らうらうしうかコウシヤラシウサ

△命婦カ

どめきたる心はなきなめり。んいとこめかしうおほどかならんこそ、イシブリアドケナウオホヤウ

らうたくはあるべけれ、とおぼしわすれずの給ふ◎病わらはやみにわ癒

づらひ給ひ、人しれぬ物思ひのまぎれも、御心のいとまなきやうに

て、春夏すぎぬ◎秋のころほひしづかにおぼしつづけて、かのきぬ静

たのおとも、みみにつきてききにくかりしさへ、恋しうおぼし出ら耳マテ

るままに、ひたちの宮にはしばしば聞え給へど、猶おほつかなう数々

のみあれば、よづかず心やましう、まけてはやまじの御心さへそひコトナラズキムツカシウ負止添

て、命婦をせめ給ふ。いかなるやうぞ。いとかかる事こそまだしらセタケ未知ワケ

ね、といともものしとおもひての給へば、いとほしと思ひて、もては命婦心外ナ心外ナ

つみのわりなきに、てをえさしいで給はぬとなんみ給ふる、と聞ゆチヨギナサニ手手

れば、それこそはよづかぬ事なれ。物思ひするまじきほど、ひとり源詞ヲトコナレヌウチ独

身をえ心にまかせぬほどこそ、さやうにかがやかしきもことわりなウチハツカシキダウリ

れ、何事も思ひしづまり給へらんと思ふにこそ。そこはかとなく、徒トドトモナツ徒

つれづれに心ぼそうのみおぼゆるを、おなじころにいらへ給はん徒然答

は、ねがひかなふ心ちなんすべき。なにやかやとよづけるすぢなら願

で、そのあれたるすのこに、たたずまほしきなり。いとおほつか荒實子末ツム

なうこころえぬこちするを、かの御ゆるしなくとも、たばかれか心キガイレテヲカシナ心

し。心いられしうたであるもてなしには、よもあらし、などかたら心

おほしわすれずの給ふ。
[玉補]夕顔上といふ詞もなくてゆくりなきやうなれど、始の書出しに応じたる詞也。下の「かのきぬたの音」もおなじ。
わらはやみに

[河]若紫巻始同時也。横の井ここに見えたり。
[評]若紫の始と同時なるはいふもさら也。ここを引合せてかの巻の脈を続き、また筆を省きて「春夏過ぬ」といひ、つひに秋にいたりて砧の音より夕顔巻の脈を引いでて、かの大道かいらうたきなごりをおぼしいでて、末摘花をとひ給ふ本を説出られたるたくみ、いひしらずめでたし作りぬしの心のはたらきに、よくよく心をとどめて見るべし。

人しれぬ物思ひ
[積]藤つぼの事也。
かのきぬたの音も

[積]上に「おほし忘すの給ふ」とありし余韻をつぎて夕顔のうへに及び、つひにひたちの宮を思ひ出給へるくさはひとしたるなり。

よづかず
[雅訳]男女かたらひよれども、未事のならざるを「よづかず」といふ也。
[積]此注よろし。旧注はみなひがことなり。

もてはなれて云々
[積]末摘花の、かけはなれて似合しからぬ事とも思ひ給はず、ただ大かたの物つづみの故に返事もし給はぬなるべし、といふ意也。但し「おもむけ侍らず」といふ詞、いささかいかか。これは末摘花のおもむけ給はぬ意と聞ゆれば、「侍らず」とては打合ぬがごとし。写誤にや。

てをえさしいで給はぬとなん
[積]手を出さぬとは、何事も引こめて事をはじめぬをいふ詞にて、俗もおなじ。

よづかぬ
[積]こは男女の事になれぬを「よづかぬ」といへる也。「世」は男女の交のこと也。

物思ひするまじきほど
[積]世中のありさまをも思ひしらぬうち、又親兄弟のありて、我身を我心にもえまかせぬ時などこそ、さやうに物はぢし給ふもことわりなれ、末摘花は年もやたけて、何事も静に思ひしり給はんと思ふにこそあれ、と也。此あたり旧注ひがこと多し。

そこはかとなく
[積]これは源氏君のつれづれにおぼすよし也。「同じ心に」とあるにてしるべし。

なにやかやと云々
[湖師]世にある好色のやうに文をやり、又媒をたのみて忍びよりなどやうなる事にはあらで、かりそめのやうにしていひよりたき、と也。

[積]「よづけるすぢ」とは、好色のすぢといふ意也。好色のかたのすぢはなく、ただかの簀子にたちて物がたりせまほし、と也。
いとおほつかなう云々

かの御ゆるしなくとも
[積]末摘花のあまり引入給へるがおほつかなう心得がたき也。

[積]とにかくに逢給ふまじければ、末摘花のゆるしなくともたばかりて我をみてゆけ、との給ふ也。
心いられしうたである云々

[岷]聊爾などは有まじき、と也。

末摘花

末摘花

末摘花

末摘花

末摘花

大かたなるやうにて

〔新物かたらふを聞給ふ様は凡に聞しめすことかたる人は思ひて申すを、御心の中にはふかく耳とどめ給ふ御くせの有、といふ也。かく先かけるは、末摘の事などつれづれの御なぐさみにのみ少しいひ出たるを、今かくせめ給ふが苦しきよしはん料也。おほかたに聞あつめて過し給ふべく覚えけるが思ひ違へなり、といはんとて也。〕
〔くせのつき給へる〕とは、初はさはなかりしが此頃つき給へる也。
「かの雨夜の品定などより」といふ意を含めたるなるべし。
よひるなど

湖師前に「物のついでにかたり聞えければ」といへる首尾なり。
姫君の御ありさまも

〔岷〕末摘の様体などのすぐれぬとは、命婦が時々のおしはかりにも思ふ也。

なかなかなるみちびきに

〔釈〕なまじひに嫌して、もし源氏君の御心になはずは、末摘花のためいとほしき事や見えこん、など命婦が思ふ也。

ききいれざらんも

〔釈〕中立の事を聞入ざらんも偏屈なるべし、と也。

ふりにたるあたりとて

〔釈〕当世風によしめかぬ家風也、といふ意なり。

あさぢわくる人も

〔釈〕浅茅は荒たる庭におふる物なれば、形容にいへり。「あと」は足跡也。なま女ぼうなども

〔釈〕よき女房もめしつかひ給はぬ故に「なま女ぼう」といへり。「あみまけて」は、事のいでこぬさきより笑てまつ意也。笑片設てなど古言にもいへり。

見もいれ給はぬなりけり

〔釈〕上に「なほ世にある人のありさまを云々」といふよりここまでは、命婦が媒をうけがへる心と、末摘花の返事し給はぬ故とを、草子地に説あらはしたる文の法也。

命婦はさらば云々

〔釈〕こより命婦がうけひきてたばかる故をいへり。もしたばかりて物ごしにもなどいひ給はん時、末摘花の源氏の御心になはずはさてもやみ給ふべし、又さるべき宿縁ありてかりそめにかよひ給はんをどがむべき親族たちもなし、とあだなる心に思ひとりて、わが父の兵部大輔にもかたはで、ただひとり事をとる也。余滴にこれを「命婦が詞也」といへるは、ひがごと也。

八月廿五日云々

〔評〕例のけしきいとめでたし。かかるけしきに催されて、末摘花のむかしよかりしをりの事などいひ出て打なき給ふこと、げにさも有べし。命婦これをよき時として、源氏君に消息して、おはしめるほどに月やうやういで、末摘花をそのかされて琴を引給ふなど、事のついで、露もみだれず。心をつけてあぢはふべし。

いとよきをりかなと

〔評〕わびしきをかこち給ふにつけて、男君まうけ給はん御心も動くべしと、命婦が思ひはかりたるさまにかけるなるべし。

ひ給ふ◎なほ世にある人のありさまを、おほかたなるやうにて聞あ

つめ、みみとどめ給ふくせのつきたまへるを、さうざうしきよひぬ

などに、はかなきついでに、さる人こそばかり聞えいでたりしに、

かくわざとがましようの給ひわたれば、なまわづらはしく、ひめ君の

御ありさまも、につかはしくよしめきなどもあらぬを、中々なるみ

ちびきに、いとほしきことや見えんなどおもひけれど、君のかうま

めやかにの給ふに、ききいれざらんもひがひがしかるべし。ちちみ

こおはしけるをりにだに、ふりにたるあたりとて、おとなひ聞ゆる

人もなかりけるを、ましていまはあさぢわくる人も、あとたえたる

に、かくよにめづらしき御けはひのもりにほひくるをば、なま女ば

うなどもゑみまけて、なほ聞え給へ、とそそのかし奉れど、あさま

しう物づつみし給ふ心にて、ひたふるに見もいれ給はぬなりけり◎

命婦はさらばさりぬべからんをりに、ものごしに聞え給はんほど、

御心につかずは、さてもやみねかし。またさるべきにて、かりにも

おはしかよはんを、とがめ給ふべき人もなしなど、あだめきたるは

やりごころは、うち思ひて、ちちぎみにも、かかる事などいはず

りけり◎八月廿日、よひすぐるまでまたるる月の、心もどなきに、

ほしの光ばかりさやけく、松の木ずゑふく風のおと心ぼそくて、い

にしへの事かたり出て、うちなきなどし給ふ。いとよきをりかなと

思ひて、御せうそこや聞えつらん、れいのいとしのびておはしたり。

今めきたるけを

〔孟〕当世の風になし奉りたき、と也。

人めしなき所なれば

〔釈〕人目なくとがむる人もなき所なれば、心やすく入給ふ也。「人めし」のしは助辞。

今しもおどろきがほに

〔箋〕源の御出を申合せざる体にする也。

〔新〕今はじめて知ておどろきたる様にて末摘花にいふ也。

しかしかこそ

〔釈〕源氏君のおはしたる事をいひまぎらはしてしらする詞也。あぢはひあり。

うらみ聞え給ふを

〔湖〕命婦がなかだちのよろしからぬと源の恨み給ふを、と也。

心になはぬよしをのみ

〔湖〕末摘の同心なきは、命婦が心にもかなひがたきと源へ申つる、と也。

〔釈〕案に、「御心になはぬ」とありしを、御の字を写し脱せしにや。ただ末摘の心になはぬことと聞ゆるをや。「すまひ」は、まげじとあらそふ意也。「すさび」とある本は聞えがたし。

みづからことわりも

〔釈〕源氏君みづから物のことわりも末摘花にいひしらせんとたまふ、と也。

たはやすき御ふるまひならねば

〔釈〕一とほりのたやすき好色にはあらで、しばしばねんごろにのたまひておはしたるなれば、ただにかへし参らせんはきのどく也、といふ意也。

〔御ふるまひ〕とあるを「源氏君の尊き事也」と思へる説はわろし。

月やうやういでて、あれたるまがきのほど、うとましく打ながめ給

ソロンロ
シダイシダイニ

籬

アタリ

源

ふに、きんそそのかさされて、ほのかにかきならし給ふほど、けしう

末

ススメラレ

カスカ

アンバイ

ワルケ

はあらず。すこしいまめきたるけをつけばやとぞ、みだれたる心に

モモ

*

ハナヤカナ

氣

△命婦ガ

ウハキナ

は心もとなくおもひぬたる。人めしなき所なれば、心やすくいり給

ハ

*

△源

ふ。命婦をよばせ給ふ。いましもおどろきがほに、いとかたはらい

*命婦

コソ

オキノドク

たきわざかな。しかしかこそおはしましたなれ。つねにかううらみ

ナ

*

云々

ン

△源

聞え給ふを、心になはぬよしをのみ、聞えすまひ侍れば、みづか

△末

イヒアラソヒ

自身

らことわりも聞えしらせんとたまひわたるなり。いかが聞えかへ

ニ

イヒ

ヘンタフ

さん。なみなみのたはやすき御ふるまひならねば、心ぐるしきを、

セウ

ヒトトホリ

ハナヤスイ

オキノドクナ

ものごしにて、聞え給はんこときこしめせ、といへば、いとほづか

イヒ

末摘

しと思ひて、人に物聞えんやうもしらぬをとて、おくさまへぬざり

詞

△イカデカ

奥ノ方

居去

入給ふさま、いとうひうひしげなり。うちわらひて、いとわかわか

初々

命婦

幼々

しうおはしますこそ、心ぐるしけれ。かぎりなき人も、おやのあつ

シンキナ

△位

かひうしろみ聞え給ふ程こそ、わかび給ふもことわりなれ、かばか

幼

コレホ

り心ぼそき御有さまに、なほ世をつきせずおぼしはばかりはつきな

ド

イなん

マダ

イツマデモ

懼

ニアハ

うこそ、とをしへ聞ゆ。さすがに人のいふことは、つようもいなび

ズ

△ハベレ

教

*末摘

アラソハ

ぬ御心にて、いらへ聞えてただきけとあらば、かうしなどさしては

ヌ

*詞

ヘンタフ

格子

鎖

有なん、との給ふ。すのこなどはびんなう侍りなん。おしたちてあ

命婦詞

△サリト乙

フツガフニ

ムリヤリニア

わあわしき御ふるまひなどは、よも、などいとよくいひなして、ふ

ワタ

タシ

イ

△シ玉ハジ

コシラハ

たまのきはなるさうじ、てづからいとつよくさして、御しとね打お

二間

障子

*

手

キビシク

梅

〔釈〕命婦みづから立て障子をつよくさす也。末摘花に安心させ奉らんとめなるべし。末摘のてづからと見たる注はわろし。

あるやうこそはと

〔岷〕末摘の心、何のわきまへもなきなるべし。

夕まどひ

〔釈〕よひよりぬふりたるをいふなるべし。新釈に「ゆふまどろみの略」とあるは、いかがあらん。されど意はたがはず。

聞ゆれば

〔釈〕ばほどの誤か。

つきせぬ御さまを

〔岷〕「つきせぬ」とは、かざりもなく風流なるさま也。

よういし給へる

〔釈〕あしくは見えじと、ひそかに心つかひし給ふけはひなり。

見しらん人にこそ

〔釈〕源の御姿を、物を見知たる人にみせたき、と也。

なにのはえあるまじき

〔湖〕末摘を思ひくたす命婦が心なり。「はえ」は、光也。

ただおほどかに

〔釈〕末摘の事也。

せめられ奉るつみさりにとて

〔釈〕命婦が源氏君に媒の事を催促せらるる迷惑さにかくはせし物から、源氏の御心とまり給はで末摘花の御物思ひやいでこん、など不安心に思ひをる也。「つみさり事」は、「罪をさげん料に」といふ意を体言にしたる詞也。「責られ」といひ、「罪」といふを、実の罪料のごとくとかれたる旧注は、ひがこと也。

えひのか

〔新〕和名抄云「文字集略」云、裏衣香、裏於業反、俗云、衣比。かく有からは「えら」といふべきを、俗に「えひ」といふのみ。さてこは焼物にあらず、かけ香なること、類聚雑要にくはしく見ゆ。ここの様にもかなへり。下の総合・梅枝・初音の巻に、ことにつけ其よしをあかすを見るべし云々。

さればよと

〔釈〕さればよ、思ひしごとく也、とおぼす也。

まして

〔釈〕遠かりしほどだに御いらへなかりしに、ちかくてはまして、と也。

此の詞あちはひ有

いくそたび云々

〔花〕童部の諺に、「無言を行ぜん」と約束して、「無言無言どう、しまにかねつく」といひて、何にても打ならして後、物いはぬ事をする也。「しま」といふは、しま也云々。

〔釈〕この花鳥の御釈にて明らか也。「まけぬらん」とあるも、童の無言行をして、はやく物いひたるを負と定むるわざくれよりいへるなるべし。さて歌の心は、今まで幾十度君が無言行に負ぬらん、我に物ないひそとの給はぬにより、それをたのみにして、又しては物いひて負るよ、と戯れたる也。

き引つくらふ。いとつつましげにおぼしたれど、かやうの人にも△ケサレ

いふらむ心キドリばへなども、夢にもしり給はざりければ、命婦のかうい

ふを、あるやうこそは、と思ひて物し給ふ。めのとだつおい人などは、△アラメ

ざうし曹子にいりふして、夕まどひしたるほどなり。わかき人ヘヤ三人あ

るは、よにめでられ給ふ御ありさまを、ゆかしきものに思ひ聞えて、△源ノ

心+げさうしあへり。よろしき御そ奉りかへつくろひ聞ゆれば、さう正

じみ身はなにの心げさうもなくしておはす。をとこはいとつきせぬ御さツム

まを、打しのび*よういし給へる御イ御ナシけはひ、いみじうなまめきて、見△物サマニ

しらむ人にこそみせめ、なにのはえあるまじきわたりを、あないと映

ほし、と命婦は思へど、ただおほどかにもものし給ふをぞ、うしろや△末ノオホヤウ

すう、さしすぎたる事は見え奉り給はじと思ひける。わがつねにせ命婦

められ奉るつみさりにとて、こころぐるしき人の、御ものおもひや△源ニ

いでこんなど、やすからず思ひゐたり。君は人の御ほどをおぼせば、源氏 末ツム

ざれくつがへる、今やうのよしばみよりは、こよなうおくゆかしとイラ

おぼしわたるに、とかうそそのかさされて、みざりより給へるけはひ、△末ノスベリ

忍びやかに、えひのかいとなつかしうかをりいでて、おほどかなるオホヤウ

を、さればよ、とおぼさる。としごろ思ひわたるさまなど、いとよコソ

くのたまひつづくれど、ましてちかき御いらへはたえてなし。わりナサケ

なのわざや、と打なげき給ふ。

いくそたび君がししまにまけぬらん物ないひそといはぬたのみ△ヲ

のたまひもすててよ

〔孟物ないひそとあるかための詞をせめていひ給へかし、と也。玉だすきくるし〕

〔河〕思はずは思はずとやはいひはてぬなどよの中の玉だすきなる

〔余古今俳諧初句〕「ことならば」。

〔釈〕引歌の詞のごとく思はずとも、いひはて給はでいたづらにかなたこなたへかけて置給ふはくるし、といふ意也。諸注此説あらくして聞とりがたし。

御めのごじじう

〔玉〕御めのとの子の侍従也。小侍従にはあらず。蓬生卷に「侍従などいひし御めのごのみこそ」とあるにてもしるべし。又「わかうど」とあるにても、乳母にはあらざることにしるし。

さしよりて

〔釈〕末摘のよみ給へるやうにせんとて、傍へさしよりてよみいでし也。

かねつきて云々

〔釈〕かの童の戯にすることく、譬をつきて結めて物いはせぬやうにせんことはさすがにいとほしくて、思はずといひもはず、こたへうきもげに、且はわけもなきことよ、といふ意也。「とぢめん」とは結局の意にて、それをかぎりにする事をいふ。口をとぢむるといふ説は、いみじきひがことなり。又花鳥に八講の論義の事をいはれたれど、ここはただ童の戯の方のみにつきていへる也。童の戯は、もとかの八講論義のわざなどより起りたるにはあるべけれど、この注にはあづからぬこと也。すべて此歌の注、諸抄いづれも説得られたるはなし。「さすがにて」の注は、湖月の師説よろし。

人づてにはあらぬやうに

〔釈〕人伝にはあらず、末摘のよみ給へるやうにいひなすを聞給ひて、末摘花の分際よりはあまへたるやうに聞給ふ也。「はやりかなるわかうど」といひ、「いとわかびたる声」といへる脈にて、おもおもしろかぬさま思ふべし。

めづらしきに

〔釈〕はじめて声を聞せ給ふが珍しき也。

中々ちふたがるわざかな

〔釈〕こことより源氏君の詞也。「さすがいとほしくてこたへまうき」とある

をうけて、しかいはれては却てこなたに閉口するわざかな、といふ意也。「くちふたがる」は、閉口といふに同じ。ここの注も諸抄説得られず。「めづらしきに中々云々」とつづけて見たるは、いよいよわるし。末のかなといふ詞にて源氏君の詞とはしるきものをや。

いはぬをも云々

〔花六帖〕心にはしたゆく水のわかかへりいはで思ふぞいふにまされる

〔玉補〕暗唾をばその比すでに「おし」といひていひかけたるか。

〔釈〕四の句補遺のごとくなるべし。「はかなき事なれど、をかしきさまにも」とある、すべて戯れなるをあかしたる語なれば暗唾をかけていへりとはしらるる也。上の「口ふたがる」もやや戯れ也。さて一首の意は、物いはぬもいふにまさるとも思へど、とにかくに暗唾のごとくおしこめて返答なきはくるし、と也。

なにのかひなし

〔釈〕返答し給はねば、しか心を尽してのたまふも何のかひもなし、との意也。

いとかかるもさまかへて

〔釈〕かやうに返答し給はぬも、人なみよりは風がはりにて、別にさるべき分別のある人にやと思ひ給ふ也。「ねたくて」は、まけて止んが残念におぼすよし也。故におしたちて入給ふ也。旧注ひがこと也。

おしあけて

〔釈〕上に命婦が障子をつよくさしたる事有。いかにしてあけ給ひにけん。されど、其世にはその様もしられたりしことなるべし。

たゆめ給へる

〔河〕油断をさせたる心也。

わが方へ

〔箋〕つばねなるべし。上の詞に源を「打」けたるすみかにする奉りて」と申たる所也。ここにて局の義見えたり。

このわかうど云々

〔釈〕「この」は「かの」といふがことし。侍従など二三人の女房をさしていへり。

おとぎき

〔釈〕光る源氏などおとに聞えたる事を体言にしたる語也。そのおとぎきに、さしてあらし事とも思はずして、しひて入給ふをもえとがめぬ、との意なり。

思ひもよらずにはかにて

〔釈〕余りに俄に入給ふ故に、末摘の何の用意もなきを笑止におもふ、と也。

に。の給ひもすててよかし。玉だすきくるし、とのたまふ。女君イ女ナシ
木ツム

メイワクナ

の御めのご侍
従、じじうとて、いとほやりかなるわか人、いと心もとオボツカ

乳母子

ソソツコイ

若

なうかたはらいたし、と思ひてさしよりて聞ゆ。△末ノ傍△

△末ノ傍△

かねつきてとぢめんことはさすがにてこたへまうきぞかつはあやナカバハ
ワケガ

ナカバハ
ワケガ

なき。いとわかびたるこゑの、ことにおもりかならぬを、人づてにナ
イ

イイトチシ

オモオモシカラヌ

人づてに

はあらぬやうに聞えなせば、ほどよりはあまへて、ときき給へど、分
際

分際

シヤレテ

めづらしきに、なかなかくちふたがるわざかな。*
源詞

カヘツテ 口 塞

いはぬをもいふにまさるとしりながらおしこめたるはくるしかり*
源

けり。なにやかやとはかなき事なれど、をかしきさまにもまめやかチヨットシタ

チヨットシタ

実

にもの給へど、なにのかひなし。いとかかるもさまかへて、おもふ*
ズットコノヤウナモ
フウギチガヒテ

ズットコノヤウナモ

フウギチガヒテ

かたことにものし給ふ人にや、とねたくて、やをらおしあけていり△アラシ
ココロニクウテ

△アラシ

ソロリト△障子ヲ

開

給ひにけり。命婦あなうたて。たゆめ給へる、といとほしければ、△コトヨ
ユダンサセ

アアビヨシナコト

ユダンサセ

△コトヨ

しらずがほにてわがかたへいにけり。このわか人どもはた、世にた命婦ノ局也

命婦ノ局也

侍従下モ

モマタ

ぐひなき御ありさまのおとぎきに、つみゆるし聞えて、おどろおどヒヤウバン

ヒヤウバン

ギヤウサン

ろしうもなげかれず、ただ思ひもよらずにはかにて、さる御ころ△末△

△末△

我にもあらず

〔**釈**〕我身ながら我身のやうにも思はれぬ意にて、あきれたるさま也。

今はかかるぞ

〔**釈**〕今はまだかくつつましげなるが、却てあはれなり、との意也。

心えずなまいとほしと

〔**湖**〕くられればよくも見給はねども、何とやらん、形あしげなる心也。

〔**釈**〕「なまいとほし」とは、形のわるきを見あらはさば末摘のためいたはし、といふ意也。よく見きはめぬ故に「なま」とはいへる也。

何事につけてかは

〔**釈**〕かたちもあしげなるになつかしくも打とけ給はず、何事につけてかは御ころのどまるべき、と也。

打うめかれて

〔**釈**〕不興を歎息する也。「なげく」といふとはいささか異也。

命婦は云々

〔**釈**〕いかがと思ふにつけて、めをさましてつづつ帰り給ふをも聞て臥あれたる、わざと知たるかほをせじとて御送になども申さぬ也。

なほ思ふにかなひがたき

〔**細**〕かやうの古宮に自然しかるべき人を見つければや、と思ひ給ひしに、さもなきを觀じ給ふ也。されども人によることなれば、未まで思ひすて給ふまじき、と也。是源の性也。

かるらかならぬ人の御ほどを

〔**釈**〕かるきしなの人ならば、かくながら止給ふともさて有ぬべきを、宮の御むすめばかりの人なれば、さやうにはなるまじきを、心ぐるしく思ひ給ふよし也。

ゆゑあらんかし

〔**釈**〕よべ御怒びありきなどありしにこそ、と咎めたる意也。

心やすき

〔**岷**〕ひとりねなれば心安く油断して寢過したり、と陳じ給ふ也。「ゆるび」は、緩の字也。

うちよりか

〔**岷**〕内裏よりの退出かごとひ給ふ也。

しかまかで侍るままだ云々

〔**新**〕ふと見れば、今退出て大殿へつげてほどなく立かへりて内へ参らん、といふやうに思はるるを、次に同車にておはせしは、即内へ参り給ひし也。然らば「しか、まかで侍るままだ」とは、「既に如是まかで侍るままだにて、いまだ内へ参らず」といふ也。「ままだ」といふに心すべし。さて既に大殿にも告たれば、君へも告んとて立よれる物也。且「やがて」は即也。今は内へかへり参るべきに侍り、と也。

朱雀院の行幸

〔**花**〕若紫と同時、横の並なり。

〔**評**〕紅葉賀の行幸の事也。若紫に舞人などえらせ給ふこと見えて、ここに又其人を定めらるる事見え、やうやうにその御いとなみのしげき事をいひて、つひに紅葉賀にいたる照応の脈、ふかく心をとどめて見るべし。是巻々の命脈をつなぐ法にて、いとよいともいみじき筆なり。

御かゆこはいひ

〔**拾**〕和名抄云「史記、廉頗強飯斗酒食肉十斤。飯音符万反、亦作「餅餅」、強飯和名古八伊比」。

〔**釈**〕粥と強飯とを召よせて、いづれにても随意にたうべ給ふなるべし。余滴にかゆこはいひとつづけよみて一物とし、「かたかゆのこと也」といへるはわろし。さる名あるべしやは。

ひきつづけたれど

〔**釈**〕源氏君の御車と頭中将の車と次々に引つづけたれど、いづれへか相乗して、ひとつは空車にて参内し給ふ也。道すがら物語し給はんため也。

猶いとねふたげ也と

〔**釈**〕これすなはち車中にての物語にのたまふ也。我に隠し給ふこと多しと、隔心し給ふを恨み給ふ也。

事どもおほく

〔**孟**〕舞樂の事定めらるる也。

かしこには

〔**湖**〕尋常なれば三日の間かよふなれば、今宵も末の方へかよひ給ふ筈なれど、禁中におはせばかよひ給はぬを、せめて「文をだに」とて夕ぐれにつかはさるる也。

もなきをぞ思ひける。さうじみはただわれにもあらず、はづかしく

△キノドクニ

つつましきよりほかの事又なければ、いまはかかるぞあはれなるか

*源心

し。まだよなれぬ人の、うちかしづかれたると見ゆるし給ふものか

男ナレヌ

モノ

ら、心えずなまいとほしとおぼゆる御さまなり。何事につけてかは

ノ

何ヤラカシナ

キノドク

御心のとまらん、打うめかれてよふかういで給ひぬ。命婦はいかな

夜深

カハリ

らん、とめさめてききふせりけれど、しりがほならじとて、御おく

聞

臥

りにともこわづくらず。君もやをらしのびて出給ひにけり。二条院

声

ソロリト

におはして、うちふし給ひて、なほ思ふにかなひがたき世にこそ、

ヤハリ

とおぼしつづけて、かるらかならぬ人の御ほどを、心ぐるしとぞお

*カルガルシカラヌ

分際

キノドクナ

ぼしける◎思ひみだれておはするに、頭中将きて、こよなき御あさ

イおはして

トハウモナイ

アサ

いかな。ゆゑあらんかしとこそ思ひ給へらるれといへば、おきあが

ネ

△何ソノヤスス

起

り給ひて、心やすきひとりねのところに、ゆるびにけりや。うちよ

*アンシンナ

床

緩

イヤナン

*禁中

りか、との給へば、しか。まかで侍るままだなり。朱雀院の行幸、け

*頭中将詞

△禁中ヨリ

*スザク

ふなんがく人まひ人さだめらるべきよし、よべうけ給はりしを、お

菜

舞

イよベナン

左

とどにもつたへ申さんとてなんまかで侍る。やがてかへり参りぬべ

大臣

スグニ△禁中へ

う侍り、といそがしげなれば、さらばもろともにとて、御かゆこは

源

△参ラシ

粥

強

いひめして、まらうどもにもまゐり給ひて、ひきつづけたれど、ひと

飯

客

ラセ

△車ヲ

イツン

つにたてまつりて、猶いとねふたげなり、とどがめでつつ、かく

ヨ

*頭中将

△禁中ニ

△我ニ

い給ふ事多かりとぞうらみ聞え給ふ。事どもおほくさだめらるる日

△禁中ニ

にて、うちにさぶらひくらし給ひつ◎かしこにはふみをだに、とい

暮

ヒタチノ宮

デモ

所せくもあるに

〔玉〕禁中よりかへり給ふ道も、雨ふりてうるさく所せくもあるに、末摘花の御方は立よりにやどり給はんによき所なるに、さもおぼさぬにや、といふなり。

〔細〕前に「いでやさやうにをかきかたの御かさやどりに、えしもや」と有し詞をうけて也。

〔歌〕ふみは後朝につかはすことなるを、さもなかりし故に「まつほど過て」といへり。源の御出をまつといふ説は、ひがこと也。

けさの御文の

〔細〕後朝のふみの遅くあるをも何ともおもひ給はぬ、と也。

〔箋〕上の句は末摘君のへだてをいふ。かかるうへに雨のさはりさへあるといふなり。

〔新〕「いふせさそふる」は、霧の上に雨さへふりて、いよいよ晴間も見えず、心ぐるしさも添る、と也。万葉に「鬱悒」を「おほつかなし」とも「いふせし」ともよみたれば、ここに二ツをかねてよめるもしかり。且「夕べ」は晩の意、「よひ」は初夜の意により。

雲まちいでんほど

〔花〕雨はれば出給はんとなり。

〔岷〕引歌あるべし。たつぬべし。

いかに心もとなつ

〔余〕雨のはれゆくほどをまつが心せく、といへる也。末摘の事をいへるにはあらず。源のみづからをのたまへるなり。

えかたのやうにも

〔玉〕拾遺に「『え』の字は引くだして、『えつづけ給はねば』と見るべし」といへるがごとし。「かたのやう」は「かたのごとく」といふに同じ。旧注ひがことなり。

はれぬよの云々

〔拾〕後撰・信明朝臣「こひしきは同じ心にあらずともこよひの月を君見ざらめや

〔歌〕月をまつは待遠なるに、ましてはれぬ夜の月まつ我さと思ひやり給へ、たとひ我と同じ心に空をながめて物は思ひ給はずとも、といふ意

也。「月まつ里」は源氏君をまつ末摘の方をいひ、「同じ心」は相思ふこと、「ながめ」は物思ふことにて、長雨ナガメをかけたる例の詞なり。諸抄の説いとたどたどしく、聞えがたし。

くちぐちにせめられて云々

〔歌〕女房どもの口々にすすむる也。

〔細〕「はひおくれ」は、紫の色のかへりたる也。紫には灰をさせば色よくなる也。

〔新〕万葉に、「紫は灰さすものぞ海石榴ウツクサ市の」とつづけたれば、椿の灰さす也。

〔箋〕常陸宮の世ざかりの時代の紙なるべし。

中さたのすぢ

〔拾〕上にいふごとく、「さだ」は「さう」也。

〔歌〕中々らぬの手すぢといふこと也。書の品を論ずれば、中の品にさだまるほどの手ゆゑに「さだ」とはいへる也。旧注みなよしなし。「もじづよう」は、筆画のしたたかにふときなり。「上下ひとしく」は、行をそろへかきて風韻のなき也。皆古代めて今やうならぬさまをいへる也。くやしなどは

〔湖〕かやうの事、源のならひ給はぬ故、かく思ひ給ふ也。

〔歌〕初て悔しいふことを知給ひしやうにかかれたり。

我ざりとも云々

〔歌〕「我」の下、はもじ有べき所なれば、かりに補ひつ。「わが」とある本は、下の詞へつづきがたし。源氏君はかはらず見はてんとおぼす也。なさけあるさまなり。

御心をしらねば

〔細〕源のすて給ふまじき御心をしらねば、なげき給ふ也。

ひかれ奉りて

〔歌〕此「奉りて」といふ詞、穏ならねど、大臣の権威いみじかりし世には、かくもいひしにこそ。

〔箋〕源の思はず大殿へおはします也。心ならぬ体也。

行幸のことを興ありと

〔歌〕行幸の時の舞楽の事を興ありとおもほす也。「あつまりての給ひ」は、その噂をし給ふ也。

とほしくおぼしいでて、夕つかたぞありける。草子地雨ふりいでて所せく△御ラミ

もあるに、かさやどりせんとはた、おぼされずやありけん。かしこ△ツノ日心

にはまつほどすぎて、命婦もいとほしき御さまかな、と心うく待ジブン

おもひけり。さうじみは御心のうちに、はづかしう思ひつづけ給ひ正身

て、けさの御ふみのくれぬるも、とかうしもなかなか思ひわき給はイなかなかごとども 又イなかなかナシ

ざりけり。

夕ぎりのはるるけしきもまだ見ぬにいふせさそふるよひの雨か※源

な。雲まちいでんほど、いかに心もとなうとあり。おはしますまじイ見ん アヒタ

き御けしきを、人々むねつぶれて思へど、なほ聞えさせ給へ、とそ女房タチ

そのかしあへれど、いとど思ひみだれ給へるほどにて、えかたのや△末心

うにもつづけ給はねば、夜ふけぬとて、侍従ぞれいのをしへ聞ゆる。トク

はれぬ夜の月まつさとおもひやれおなじころにながめせずと△其ウチニ

も。くちぐちにせめられて、むらさきのかみの、としへにければは紙

ひおくれ、ふるめいたるに、御てはさすがにもじづよう、なかさだ後

のすぢにて、かみしもひとしくかい給へり。みるかひなう打おき給上

ふ。いかに思ふらん、と思ひやるもやすからず。かかることを、く下

やしなどはいふにやあらん。さりといかがはせん。我はざりとイ御ナシ

も心ながう見はててむ、とおぼしなす御心をしらねば、かしこには手

いみじうぞなげい給ひける◎おとどよにいりてまかで給ふに、ひか画

れ奉りて、おほい殿におはしましぬ。行幸のことをけうありとおも剛

いみじうぞなげい給ひける◎おとどよにいりてまかで給ふに、ひか中品

れ奉りて、おほい殿におはしましぬ。行幸のことをけうありとおも灰

いみじうぞなげい給ひける◎おとどよにいりてまかで給ふに、ひかヒタチノ宮

その比の事にて
【岷】舞ならひなどし給ふ事を、その比のことわざにて、と也。
物のねども云々

【釈】「すぎゆく」とあるは、月日の過ゆくことをおほかたに先いふ也。さて「物のねども云々」より、こよひのありさまを立かへりて委しくいふ例の法也。

かたがたいどみつ

【釈】いづれもまけじおどらじとあらそひて稽古し給ふ也。
大ひちりきさくハ

【弄】今の世のよりも大なるひちりきが昔はありし也。「尺八のふえ」も、むかしは一尺八寸に竹をきりたる物有て楽器に用ゐたる也。

たいこそさへ

【孟】打物は地下の役、吹物は各の物なれども、興に乗じて高欄のもとにて各うたれたるなり。

てづから

【釈】花鳥の例、余釈に引たるがごとし。

ぬすまはれ

【拾】万葉十一ハ情ニさへまだせる君に何をかもいはずていひしとわがぬすまはん。ハ山川に筥ヲをふせ置てもりあへず年の八年をわがぬすまひし。

【釈】これは語のはたらきの例也。ここはしのびゆき給ふ事をいへり。わが身を盗むやうにする意也。

しがく

【岷】試楽也。楽のならし也。紅葉賀巻に「試楽を御前にてせさせ給ふ」と有て、其時の事也。

なきぬばかり

【拾】「なきぬ『べき』ばかりに」と心得べし。拾遺に「うつろはんことだにをしき秋萩にをれぬばかりもおける露かな伊勢。此ぬに同じ。」

くたいてける

【拾】命婦が心をさまさまに摧ツきしかひもなくといふなるべし。
【新】春海考るに、命婦の心にくくやみなんと思へりしを、源氏の打くできてあひ給へりしかど、さる心のとほらねば、此人の思ふらんをさへおぼす也。

【釈】春海が考のかた、語脈にはかなひたり。されど、その方にては、なほ旧説のごとく「腐クいて」の方よろし。「腐クいて」は、くさらしてやくにたたぬやうにしたる意也。さて此人の心もなく思ふらんといふ意なるを、例の打かへしていへる語脈也。

物思ひしらぬやうなる

【釈】余り物もいはずれなきやうなるを、「物思ひしらぬ」といへり。

我も打参まる

【釈】源氏君のうつくしきを見て、命婦もおのづから参まるやうにおほえて、しひてえ恨みぬ也。

わりなの人

【釈】「わりな」は、「御よはひ」へかかる意なり。御齡ハの若くして、人にくらみられ給ふがわりなき也。「思ひやりすくなう云々」は、人のうへを思ひやり給はず、我御心にまかせてわがままにふるまひ給ふも、御よはひのわかき故なれば尤なり、と思ひかへしたる也。

この御いそぎのほど

【細】行幸すゞして、と也。

かの紫のゆかり

【花】紫のひめ君の二条院へうつろひ給ふ事、行幸はてて霜月のころ也。
【評】この所、若紫巻に引合せて、かつ六条御息所の伏線の脈をあらはし

つつけたる中に、おのづから抑揚の勢ひあり。心をつけてうかがふべし。

ほして、君たちあつまりての給ひ、おのおのまひどもならひ給ふを、
イニナシ

そのころの事にてすぎゆく。物のねども、つねよりもみみかしがま
△月日方 ヤカマシ

しくて、かたがたいどみつつ、れいの御あそびならず、大ひちりき
ク タガヒニハゲミ ツネ 遊 篳篥

さくはちのふえなどの、おほご糸を吹あげつつ、たいこそさへ、こ
尺八 笛 大音 太鼓

うらんのもとにまろばしよせて、てづからうちならし、あそびおは
勾欄 コロバシ 手打鳴

さうず。御いとまなきやうにて、せちにおぼす所ばかりにこそ、ぬ
△源ハカヤウノコトニ ネンゴロ

すまはれ給へ、かのわたりには、いとおほつかなくて、秋くれはて
ノビユキ ヒタチノ宮 マチドホニテ

ぬ。なほたのみこしかひなくてすぎゆく◎行幸ちかくなりて、しが
マヤハリ キタ 試楽

くなどののしるころぞ、命婦はまぬれる。いかにぞなどどひ給ひて、
イヒサワゲ △源ノ方ハ 源

いとほしとおぼしたり。有さま聞えて、いとかうもてはなれたる
命婦 詞 △末ハ

御心ばへは、見給ふる人さへ心ぐるしくなど、なきぬばかり思へり。
△源ハ ワタシマデ イニ

心にくくもてなしてやみなん、とおもへりしことをくたいてける、
源心 △命婦方 腐 △ヲハ

心もなくこの人の思ふらんをさへおぼす。さうじみのものもいはで、
命婦 マテ△キノドクニ 正身 未ツム イハ

おぼしうづもれ給ふらんさま、思ひやり給ふもいとほしければ、い
源詞

とまなきほどぞや。わりなし、と打なげい給ひて、物おもひしらぬ
コロ ヨギナシ △末ハ

やうなる心ざまを、しばしこらさんと思ふぞかし、とほほ参み給へ
イシハシナシ チトノマ 懲 微 笑

る、わかうつくしげなれば、我もうち参まる心ちして、わりな
△方 命婦 笑 ヨキナ

の人にくらみられ給ふ御よはひや。思ひやりすくなう、御心のまま
△シゴロ 少

ならんもことわりとおもふ。この御いそぎのほどすゞしてぞ、とき
モットモ 行幸ノコト

どきおはしける。かのむらさきのゆかりたづねとりたまひては、そ
△ヒタチノ宮ハ

所せき御物はちを

〔釈〕末摘の、所せきまで物はちして対面し給はぬを、しひて見あらはさんの御心もなくて月日の過ゆくに、と也。

打かへし云々

〔釈〕もし打かへしてうらうへに見まさりする事もあらんかとおもほして、見まほしき也。旧注何れもひがごと也。

てさぐりの云々

〔玉〕あやしく心得所のあるやうにおぼえしは、ただ手さぐりのたどたどしき故にて、実には然らざるにや、よく見まほし、といふ也。

けざやかに

〔釈〕湖月に校合したる一本に、此上に火をどあれど、ここはしかいふべき所とおぼえず。なかなかにわろし。後人の加へたるにや。

まばゆし

〔釈〕此下に、とおもほして、といふ詞など有しが落たるにや。このままにては、源氏君のおもほす事とし給ふわぎを地よりいふとのけぢめなし。打とけたるよひるのほど

〔釈〕常陸宮に人々の宵居してうちとけ用心せぬ時、ひそかに入て格子のすきまよりかいまみ給ふなり。「よひる」は、宵のほど人々居つどひて物語などすること聞えたり。上下におほし。

〔評〕此段は、空蟬巻に基打たる所をかいまみ給ひて、思ひの外にをかきさまを見つけ給ひたる事の反対にて、いともいともわるかめるありさまをあらはしたり。其中に、末摘花はさすがに上の品の人なれば、衰へたれどしどけなからず、古代の礼法みたれぬさまをあらはされたるなど、殊にめでたし。心を付べし。

心もとなくて

〔釈〕此でもじ不用めきたり。もしくは衍か。

ひそく

〔花〕今案、「秘色」はあをき茶碗の類をいふ也。

〔拾〕此「秘色」は、台の上に飯なども器なり。「くさはひもなく」は、可然料理もなき也。「くさ」は種の字、「はひ」はあぢはひなどの「はひ」歟云々。

〔釈〕この文、ひそくやうの物もろこしのなれど、といふ意と聞ゆ。されど少しいかが。「人わろき」とは、ふるびてさまのわろき意、「あはげ

なる」は、「なり」の誤か。又は「あはればなるを」とふくめたる意にもあるべし。

まかでて人々くふ

〔新〕末摘の前を退出て、本より何のくさはひもなきおろしを人々のくふ也。すみの間はかりにぞ云々

〔釈〕末摘花の居給ふ寝殿の角の間なるべし。さて此「にぞ」とあるぞもじの結び、下になくていかが。もしくは「しびら引ゆひつけたる」とあるたるにて結びたるか。されどなほ穩ならず。考ふべし。

しろききぬの云々

〔釈〕白き衣を着たるは儀式めきたる也。しびらをつけたるも主の御前なれば也。夕顔巻に見えたと相応して思ふべし。此あたりみな衰へたれど、古代の礼のままにし給ふさまをいへる也。

さすがにくしおしたれて

〔河〕倍膳に候ずる女房、櫛をさすこと本儀也。然りといへども、毎事ふるめかしくをかしき体也。

内教坊内侍所

〔新〕内教坊は舞妓の楽習ふ所、内侍所は神鏡を斎きまつる所にて、巫女のごとき女房の老たるが侍る也。これらの女のすがたはいとあやしくて、やんことなきあたりの女房とはことなるが、この宮の女どもの似たる也。

かかるものごものあるはや

〔釈〕「はや」は歎息の辞也。ここはをかしきものを思ひ合せ給へる勢ひをそへてはやとはかける也。

かけても人のあたりに

〔釈〕「かけても」は、知給はざりけりへ係る語脈也。かやうのあやしき女どもの、貴人のあたり近く立よるものとは、かけても思ひしり給はず、といひて、源氏君のにぎははしく貴きさまを頭はしたり。

あはれさも寒きとしかな

〔釈〕「あはれ」と読きりて、「さも寒き」とよむべし。「あはれ」は歎息の辞也。「さも」は今俗さてもといふが如き意也。「いのち長ければ」とは、老女なる故にいへり。内教坊内侍所の応也。老子に「寿則多辱」といふをふくめたり。なりけりも歎息の辞。

のうつくしみに心いり給ひて、六条わたりにだに、かれまさり給ふ

イタハリ

サヘ 離

めれば、ましてあれたるやどは、あはれにおぼしおこたらずながら、

末ムノ方

意

物うきぞわりなかりける。ところせき御ものはぢを、見あらはさん

タイギナ

ナサケナ

△末メツサウナ

の御心も、ことになくてすぎゆくを、打かへし見まさりするやうも

殊

ニ△モシウラウヘニ

ありかし。てさぐりのたどたどしきに、あやしう心えぬ事もあるに

* 手サハリ

オボツカナイ △テ

や。みてしがなとおもほせど、けざやかにとりなさんもまばゆし、

ミタイモノチヤ

* 湖イ火を

キツハリト

* カガヤカシイ△

うちとけたるよひあへのほど、やをらிரり給ひて、かうしのはさまよ

* トオホシテ

宵居 シブン

ソツト

格子

り見給ひけり。されどみづからは見え給ふべくもあらず。几丁など

末 ム

いたくそこなはれたる物から、年へにけるたちどかはらず、おしや

損

タテコロ

押

りなどみだれねば、心もとなくて、ごたち四五人あたり。御だいひ

* オボツカナク

御

* 台 秘

げなる女房、しろききぬのいひしらずすけたるに、きたなげなる

サウ

白

イハウヤウモナク

煤

しおしたれてさしたるひたひつき、ないけうばう、内侍所のほどに、

＊ 結 着

＊ 腰

＊ 内 教 坊

かかるものごものあるはや、とをかし。かけても人のあたりに、ち

＊ 櫛 押 垂 挿 額

かうふるまふ物とも、しり給はざりけり。あはれ、さもさむきとし

＊ 命 長

＊ 女房詞

＊ 寒 年

かな。いのちながければ、かかる世にもあふものなりけり、とてう

色

唐 土

フルビタル

種

あはれげなる、まかでて人々くふ。すみのまばかりにぞ、いとさむ

＊ 食 角 間

＊ 寒

げなる女房、しろききぬのいひしらずすけたるに、きたなげなる

＊ 結 着

＊ 腰

＊ 内 教 坊

しおしたれてさしたるひたひつき、ないけうばう、内侍所のほどに、

＊ 櫛 押 垂 挿 額

かかるものごものあるはや、とをかし。かけても人のあたりに、ち

＊ 命 長

＊ 女房詞

かうふるまふ物とも、しり給はざりけり。あはれ、さもさむきとし

＊ 命 長

＊ 女房詞

＊ 寒 年

かな。いのちながければ、かかる世にもあふものなりけり、とてう

色

唐 土

フルビタル

種

あはれげなる、まかでて人々くふ。すみのまばかりにぞ、いとさむ

＊ 食 角 間

＊ 寒

げなる女房、しろききぬのいひしらずすけたるに、きたなげなる

＊ 結 着

＊ 腰

＊ 内 教 坊

しおしたれてさしたるひたひつき、ないけうばう、内侍所のほどに、

＊ 櫛 押 垂 挿 額

かかるものごものあるはや、とをかし。かけても人のあたりに、ち

＊ 命 長

＊ 女房詞

＊ 寒 年

とびたちぬべく

〔河〕世中をうしとはさしも思へども飛立かねつ鳥しあらねば。此歌は、万葉・貧窮問答の長歌の反歌也。尤よせある歟。
〔拾〕今按、万葉第五に「うしとやさし」とあり。書写の誤か云々。

たちのきて

〔釈〕源氏君、格子のもとを立のきて、只今来給ふやうにしてたき給ふ也。そそや

〔釈〕今の俗言にソリヤコンなどいふ意の辞にて、源氏君のおはしたるに驚きたるさま也。

格子はなちて

〔釈〕鎖したる格子を取はなちて也。

侍従は齋院に

〔弄〕齋院誰ともなし。

〔湖〕葵巻に齋院に立給ふより前の齋院なるべし。

〔釈〕桐壺帝の御代の齋院なり。侍従を省きて、いよいよ末摘花のわろびたるさまをいはんの伏案。

いととづれふなりつる雪

〔湖〕前に「あはれさも寒き年かな」といへるをうけて、愁へ思へる雪、猶かき乱れつよくふる、と也。

〔釈〕前に「寒き年」といへるを、ここに「雪」と転じたる文のはたらき、いみじくめでたし。「かきたれ」の「掻」は例の語勢の発語、「たれ」は「垂」にて、空より垂るやうにふる意なり。

大となぶら消にけるを云々

〔評〕前に「寒き年」といへるを起して「雪」と転じ、「風」をそへて燈火をけち、ともしつくる人なきわびしさをいひて、さて夕顔の何がしの院の事を引出てくらべたる巧、いひしらずめでたし。

ほどのせばう云々

〔釈〕あれたるさまはかの何がしの院にも劣らねど、ここはほどの狭くして人氣の少しあるなど、かしこよりは心やすき、と也。

かくたのみなくとも、すぐるものなりけりとて、とびたちぬべく△月日心ふ

るふもあり。さまざまに人わるき事どもをうれへあへるを、きき給戦

ふもかたはらいたければ、立＊のきて、ただいまおはするやうにて、キノドクナ

うちたたき給ふ。そそやなどいひて、火とりなほし、かうしはなち＊格子

ていれ奉る。侍従は齋院にまぬりかよふわか人にて、この比はなか△格子ヲ

りけり。いよいよあやしう、ひなびたるかぎりにて、見源心ならはぬこキナカメキ

こちぞする。いとどうれふなりつる雪、かきたれいみじうふりけり。愁

空のけしきはげしう風ふきあれて、おほとなぶらきえにけるを、と大

もしつくる人もなし。かの物におそはれしをり、おぼし出られて、燈

あれたるさまはおとらぎめるを、ほどのせばう、人げのすこしある荒

などに、なぐさめたれど、すぐうたていざとき心ちする夜のさま慰

なり。をかしうもあはれにも、やうかへて心とまりぬべきありさまカハリテ

を、いともれすくよかにて、何のはえなきをぞ、くちをしうおほヒッコロミツヨウテ

す。からうじてあけぬるけしきなれば、かうしてづからあげ給ひて、ヤウヤウノコトテ

まへの前栽の雪を見給ふ。ふみあけたる跡もなく、はるばるとあれ△人ノ

わたりて、いみじうさびしけなるに、ふりいでてゆかんこともあは格

れにて、をか源詞しきほどの空も見給へ。つきせぬ御心のへだてこそわジブン

りなけれ、とうらみ聞え給ふ。またほのぐらけれど、雪のひかりに、サケナ

いとどきよらにわかう見え給ふを、おい人どもゑみさかえて見奉る。暗

はやいでさせ給へ。あぢきなし。心うつくしきこそなど、をしへ聞△女ハヨケレ

老人どもゑみさかえて

〔釈〕上の老女房ども也。「ゑみさかえ」は、余念なくうれしげに打笑むさま也。古事記・八千矛神の御歌に「朝日のゑみさかえきて云々」。

さすがに人の聞ゆる事を

●末摘花の本性、上にも見えたり。見ぬやうにて

●源氏君、末摘を見ぬやうにて外の方をながめ給へれど、しり目をして見給ふ也。事のさま写し得て、生るが如くはたらくがごとし。いかにぞ

●上に「打かへし見まさりするやうもありかし」といへるをうけたる脈也。故に「いかにぞ」といへり。

●坐し給へるだけの高さ也。「先ッ」といへる、いとよろし。をせなかに

●玉かもじ、清べし。背のたわみまがれるをいふなるべし。「なか」は、長の意にはあらじ、ただ背の長きばかりは、むねつづるといふほどもあるべからず。

●此説はいかが也。背を「せなか」といはんもいかなるに、背中に「見え給ふ」とはいひがたし。旧説のごとく、背の長き意也。背の長きは、おのづから曲れるやうに見ゆるもの也。をば軽く添たる発語。ふとめとまる

●大やうに見もてゆくうちにはやく目につく意也。

●げんぼさちの乗物

●普賢菩薩、乗大白象。鼻如紅蓮華色。観普賢經

●和名抄云「鼓鼻、野王按、鼓、音砂、和名逆岐美波奈、鼻上砲也」。俗に栴檀鼻といふ、これなり云々。

●雪はつかしくしろうてさをに

●拾かげろふ日記に「あなさむ。雪はつかしき霜かな」。万葉第十六怕物歌に「人だまの佐青なる君がただひとりありし雨夜は久しとおもほゆ」。●白く青ひれたるなるべし。はれたるに

●額の大きなるに下がちに見ゆるは、よくよく長き貌となり。ちひさき額ならば、はてしもなく長くは見ゆまじき也。ここを「こよなう晴たる」とかけり。

●玉補「はれ」は晴なり。腫にはあらず。「猶下がち」といへるにてしるべし。

●はらばひて

●細 鬘 莊子

●河 やせつまりたる也。

●新老さらばひてふが如くにて、木などの雨露に曝て、肉はなく真骨ばかりあるにたとへいふ語也。「ほひ」は、よろぼひといふがごとき辞なり。いたげなるまで

●岷 あまり瘦たるは、骨高にていたさうなる也。

●な にのこりなう云々

●かくわるきかたちを何故に残なく見あらはしつらんと後悔し給ふ物から、又あまりに珍らしきさまなれば、おのづから見やられ給ふ、と也。事のさまいとをかし。かみのかかりはしも

●「髪のかかり」とは、髪髪の垂垂かりたるさまをいふと聞ゆ。「かかれば」と濁りよみて、「懸り場也」といふ注はわろし。さてはしもといふ辞へうけがたし。はもじ清べし。ただてにをは也。うつくしげにめでたしと云々

●湖 源氏のよき人と見給ふ藤壺・葵上など也。

●うちきのすそに

●桂ツツキのすその引れたる上に髪髪のたまりて、猶一尺ほど引余りたる也。着給へる物どもをさへ云々

●かたのわろき事を余りなるまでこちたくいひたてたるうへに、又きもの事をいはんは、かへすがへすくちさがなきやうなる故に、かくことわりたる作者の用意、いと心にくし。

●むかし物語にも

●いづれの昔物語にもその人の装束を第一にいひたれば、今もまたもらすべきにはあらずとなり。此物語を物がたりめかさずいはれたる、例のことながらいとよろし。

●ゆるし色のわりなうはじらみたる

●一翁云「花鳥に『紅紫はふかき色を禁色となづけ、あさきをゆるし色といふ云々』とあるはわろし。ゆるし色は、すなはち禁色の事にて、なべてはゆるさぬ色なれど、功勞によりてゆるさるるを規摸とすれば、ゆるし色といふ世云々下略。「うはじらみたる」は、色のふるびてうへの白くなりたるをいふ。

ゆれば、^{末摘}さすがに人の聞ゆる事を、えいなび給はぬ御心にて、とか

うひきつくるひて、^{スベリ}おさりで給へり。見ぬやうにて、^{外方}とのかたを

ながめ給へれど、^{後目}しりめはただならず。^{ドウチャソ}いかにぞ、打とけまさりの

いささかもあらばうれしからん、とおぼすも、^{ムリ}あながちなる御心な

りや。^{一ハニ居 丈}まづみだけのたかうをせながら見え給ふに、^{背長}さればよとむね

つづれぬ。打つぎて、^次あなかたはと見ゆるものは、^鼻御はななりけり。

●ふとめとまる。^{普賢菩薩}ふげんぼさちののり物とおぼゆ。^{象ナリ}あさましうたかう

●のびらかに、^{ナガヤカ}さきのかたすこしたりて色づきたるほど、^垂ことのほか

にうたてあり。^{ミゲルシイ}いろは雪はつかしくしろうてさをに、^{白 青 額}ひたひつきこ

よなうはれたるに、^晴なほしもがちなるおもやうは、^{下 面}おほかたおどろ

おどろしうながきなるべし。^長やせ給へること、いとほしげにさらば

ひて、^肩かたのほどなどは、^{痛サウ}いたげなるまで、^衣きぬのうへだに見ゆ。

●な にに残りなう見あらはしつらんと思ふ物から、^珍めづらしきさまの

したれば、^髪さすがにうちみやられ給ふ。かしらつきかみのかかりは

しも、^美うつくしげにめでたし、と思ひ聞ゆる人々にも、^{アンマリ}をさをさお

とるまじう、^{桂 裾 溜 曳}うちきのすそにたまりてひかれたるほど、一尺ばかり

あまりたらんと見ゆ。^着き給へる物どもをさへいひたつるも、ものい

ひさがなきやうなれど、^{ガワル イ}むかし物語にも、人の御さうざくをこそは、

まづいひためれ。^先ゆるしいろのわりなううはじらみたるひとかさね、

ゆるし色といふ世云々下略。「うはじらみたる」は、色のふるびてうへ

なごりなう黒きつつき

〔新桂〕に大小ありて、小桂を女の着ることは常也。やんことなきあたり
にのみ着るやうにいへる注はいかにぞや。枕草子に清少納言のきたる事
あるに、異なるよしありて着しとも見えず。此文などにも空蟬君なども
きたれば、大かたの女房は着ることなりけり。又紅は、深紅にても古き
は上しらみゆき、深紫の古きは、いよいよ黒くなりて、あかねざしたる
にほひの失たれば、「なごりなく」とはいへり。

ふるきのかはきぬ

〔新和名抄〕云「貂音調、和名天、似鼠黄色、皮璫ケリルニ作衣」。又云「黒貂、
唐韻曰、貂有黄貂黒貂、出東北夷、黒貂、和名布流木」。

〔積〕今俗てんいたちといふ獸の皮也。此物寒を防ぐによしといへり。猶
余積に記しつ。

いときよらにかうばしきを

〔評〕あまりにわるき事をいひつづくる故に、かたちには髪をほめ、衣服
に黒貂の裘を「きよらにかうばしき」といへる、めでたし。されど、か
かるあやしき物着給へるは古代の風なれば、「若やかなる女の御よそひ
には云々」とて、又おとしめられたり。抑揚法ありてすきまなき筆也。
いともてはやされたり

〔新〕是は故宮の遺風にていともてはやして此かは衣をはれと着給ふをい
ふなるべし。

〔積〕此所脱字など有か、少し穩ならず。このままにていはば、貂裘のお
どろおどろしく異やうなるが「もてはやされたり」といふ意と聞ゆ。「も
てはやす」は、そのおどろおどろしきをもてはやす意也。旧注どもは更
によしなし。

この皮なうてはた寒からまし

〔積〕貂裘の寒をふせぐ事、漢籍にも見ゆ。これはすべて戯れていへる也。
われさへ

〔湖〕末摘の物のたまはぬに對して「我さへ」といへり。

〔湖〕前に「君がしじま」とよみ給ひしをうけて「例の」といへり。末摘
のけふは又物いひ給ふかどこころみ給はんとて也。

くちおほひ

〔湖〕袖にて口もとをおほふ也。恥るさま也。

きしきくわんの

〔河〕儀式官。

〔花〕政官などを云。

〔細〕弁少納言・内記・外記・史などをいふ也。ことごとしき様をいふ也。
〔湖〕師此弁少納言など、公事などにねる時、ひぢをはりていかめしくし
て出る也云々。

〔新〕或抄に、太政官の弁少納言などをのみ儀式官といふやうに注せるは、
おぼつかなし。先は式部の輔をいふべくおほゆ。

〔積〕末摘花のさま、儀式の官人の、もの持てねる時のはり臂のさまに似
たり、といふ也。「ひぢもち」は、臂つきといふほどの意也。物はもた
でも笏などもちて臂を張たるべければ、もちとはいへるなるべし。

たのもしき人なき云々

〔積〕かく衰へ給ひて後見する人もなき御有さまを、見そめたる我には疎
からずむつまじうて、何事も包み給はぬこそ本意あることちもすべけれ、
いつまでもゆるしなくとうとき御けしきなるが、つれなうこそあれ、
どの給へる也。「ことつけて」とは、末摘花のつれなきにかこつけて早
く出給へる也。

朝日さす云々

〔箋〕「つらら」も「垂氷」も同事也。朝日にあたる軒の垂氷はさすがに解て、
露はずがれどもいまだころよく氷はどけざる也。末摘君の心のどけた
るに似て、更にさもなしといへり。とけながら猶むすばほるとよめり。
又つららのさまもさるやうなるべし。

〔積〕「垂氷」は軒より垂下りたる氷にて、今俗のつららといふ物也。又「つ
らら」はただに氷の事也。折からのけしきにあはせてよまれたるなり。
ただむむと打わらひて

〔積〕「むむ」は口をつぐみたる声也。口をあきてまでは笑ひ給はぬ也。
恥らひたるさまをいとよく書とられたり。

御車よせたる中門の

〔積〕源氏君の御車、中門によせかけてある也。その中門、いたくふるびて倒れかかりたるさま也。
よめにこそ云々

〔積〕夜はかく荒たるさまは著きながらも、よろづたどとしくして隠れたる事も多きを、昼となりては何事ものこりなく見ゆるなり。

なごりなう黒くろきうちきかさねて、うはぎには黒ふるきのかはぎぬ、

いときよらにかうばしきを着き給へり。こだいのゆゑ古づきたる御さう

ぞくなれど、なほわかやかなる女の御よそひには、にげなう、おど

ろおどろしきこと、いともてはやされたり。されどげにこのかはな

うてはた、さむからまし、と見ゆる御かほ寒ざまなるを、こころぐる

しと見給ふ。何事もいはれ給はず、われさへくちとぢたる心ちし給

へど、れいのししまもこころみると、とかう聞え給ふに、いたうは

ぢらひて、くちおほひし給へるさへ、ひなびふるめかしう、ことご

としう、きしきくわんのねりいでたる、ひぢもちおぼえて、さすが

に打ゑみ給へるけしき、はしたなうすずるびたり。いとほしくあは

れにて、いとどいそぎ出給ふ。たのもしき人なき御有さまを、見そ

めたる人には、うとからず思ひむつび給はんこそ、ほいある心ちす

べけれ。ゆるしなき御けしきなればつらう、などことつけて、

朝日さす軒のたるひはとけながらなどかつららのむすばほるら

ん。との給へど、ただむむとうちわらひて、いとくちおもげなるも、

いとほしければ、いで給ひぬ。御車よせたる中門の、いといたうゆ

がみよろぼひて、よめにこそしるきながらも、よろづかくろへたる

あれまどへる

〔**釈**〕荒たることをつよくいはんとて「まどへる」とはいへる也。

松の雪のみあたたかかけ

〔**花**〕松の雪はしろき綿をむしりかけたるやうなれば「あたたかかけ」とはいふにや。

〔**新**〕春海考、末摘花のありさまをはじめ、家居のさまもあれてすさまじう寒げなれば、松の雪のみあたたかなるやうに思ひなざるをいふ也。さておのづから綿にも見なしていふならん。

〔**釈**〕松は雪のつもりやすき物にて、ふくよかに降つめるを「あたたかかけ」とはいへる也。其外の木どもはさばかりはたまらぬ也。かくて此宮のうちのさむげなるを言の外ににはほせたり。綿のたとへもさる事ながら、文のうへ、さまざまには聞えぬにや。

かの人々のいひし

〔**釈**〕雨夜の物語に「世にありと人にしられず、さびしくあばれたらんむぐらのかどに、思ひのほかにはらうたげならん人の、どちられたらんこそ云々」といへるを受て、げにとはいへる也。

あるまじき物おもひは

〔**孟**〕藤壺を切におもひ給ふ心はそれにまきれん、と也。

思ふやうなるすみかにあはぬ

〔**釈**〕かく思ふやうなるすみかに打合ぬ末摘花のありさまは、とりどころなし、と也。

我ならぬ人は云々

〔**岷**〕末摘のかたちのあしきを見あらはし給ひては、いよいよ見すて給ふまじきところなり。

ちちみこの云々

〔**湖**〕宮のたましひを此姫君にたぐへ置給ひけん、と也。

〔**釈**〕我かく見ぞめしは、父みこのたましひのしるべし給ふならん、と也。

うらやみがほに松の木の

〔**釈**〕橘の雪のほらはれたるにふれて、その傍の松の木も雪の落て起かへりたるを、「うらやみがほに」とあやどりて書る也。末摘花をあはれみ給ふ御めぐみにつれて、家のうちの人々も余沢を蒙るころなどもあらんか。

名にたつすゑの

〔**河**〕我袖は名にたつ末の松山から空より波のこえぬまぞなき

〔**余**〕後撰・恋二・土佐。結句「こえぬ日はなし」と有。

〔**釈**〕松のおきかへりたるにつきて、さどこぼるる雪のさま、引歌の「空より波のこゆる」といへるごとく見ゆるけしきなどのえもいはれぬを、ただよのつねのさまほどになりともあへしらはん人もあれかし、と也。末摘花のくちをしきを歎き給ふなり。花鳥にはなみこすすゑのとして、

〔**浦**〕ちかくふりくる雪は白波の末の松山こすかとぞ見る、といふ歌を引給へり。さる本も有しにこそ。されど「名にたつ」といふかた、よろしあへしらはん

〔**釈**〕諸本「あひしらはん」と有しを、今改めつ。誤れることしるれば也。いとみじきぞ

〔**湖**〕年よりたる也。

〔**拾**〕桜井素丹といふ人のよみけるを聞て、聞書などせる古本を見しには、

いとみじかきぞ、とありき。

〔**釈**〕右の本はわるし。「短き」はここに用なし。

むすめにやうまごにや

〔**湖**〕翁のために姫か孫かと也。

はしたなる

〔**箋**〕平なる也。どちらへもつかぬといふ比の女なるべし。

雪にあひて

〔**箋**〕雪にはえあひて白き衣のいよいよすけて見ゆる也。

あやしき物に云々

〔**釈**〕「あやしき物」とは、火を入る器ならぬ物に、かりに火を入たる故にいへる也。「袖ぐくみ」とは、袖のうちに引入れてもたる也。よりて引たすくる

〔**岷**〕はしたなる女のたすくるなり。

御供の人よりてぞ

〔**岷**〕翁と女と二人してえ門をあけねば、源の御供の人のあくる也。

〔**評**〕翁に女をそへても猶門をえあけねば、御供の人よりてあくるなど、わびしきさまのきはみといふべし。「沓をぬぎてかゆきをかく」といふべき文章也。上に中門のゆがみよろほひたる事をいへる處、いといとめでたし。

ことおほかりけれ、いとあはれにさびしくあれまどへるに、松の雪

のみ、あたたかげに降つめる、山ざとのこちして、物あはれなる

を、かの人々のいひしむぐらのかどは、かうやうなる所なりけんか

し。げに心ぐるしくらうたげならん人を、ここにすゑて、うしろめ

たう恋しとおもはばや。あるまじきもの思ひは、それにまきれなん

かし、と思ふやうなるすみかにあはぬ御ありさまは、とるべきかた

なし、と思ひながら、我ならぬ人は、まして見しのびてんや。わが

かうて見なれけるは、ちちみこのうしろめたし、とたぐへおき給ひ

けん玉しひのしるべなめり、とぞおぼさるる。たち花の木のうづも

れたる、みずぬじんめしてはらはせ給ふ。うらやみがほに、松の木

のおのれおきかへりて、さどこぼるる雪も、名にたつすゑの、と

みゆるなどを、いとふかからずとも、なだらかなるほどに、あへし

らはん人もがな、と見給ふ。御車いづべきかどは、まだあげざりけ

れば、かぎのあづかり尋ねいでたれば、おきな老翁のい甚といみじきぞい

できたる。むすめにや、うまご孫女にや、はしたなるおほきさ大の女の、

きぬは雪衣にあひてすすすけまどひ、さむしと思へるけしきふかうて、

あやしき物に、火をただほのかにいれて、袖ぐくみにもたり。おき

なかどをえあけやらねば、よりてひきたすくる、いとかたくななり。

御立ももの人よりてぞあけつる。

ふりにける云々

〔花〕「あさの袖」は、朝の袖也。

〔河〕秋の野のささわけし朝の袖よりもあはでぬるよぞひぢまざりける
〔積〕翁が年ふりて、わびしき頭の雪を見れば哀にて、源氏君も翁におと
らず袖をぬらし給ふ、と也。「ふり」は雪の縁、「かしらの雪」は白髪
たとへなるを、今のけしきにそへていへり。

わかきものはかたちかくれず

〔河〕夜、深煙火尽、霰雪白紛々、幼者形不蔽、老者体無温、悲端与
寒氣、併入鼻中辛。白氏文集 秦中吟

〔花〕幼者といふをばはしたなる女によそへ、老者をば翁にたとへたり。
はなの色にいでて

〔積〕右の詩の末句、入鼻中とあるより、ふと末摘花の事を思ひいで給
ふやうに書なしたる也。寒ければ鼻のさき赤く色づくものなれば、「色
にいでて、いとさむし」といへる也。小楠補遺に「此はなはただ目鼻の
はな也」といへれど、猶旧注のごとく花をかねたる意ある故に、「色に
いでて」とはいへるなるべし。「ほほゑまれ」は、おのづからにゑまる
るをいふ。

つねにうかがひくれれば

〔積〕頭中将も常に此宮へうかがひくれれば、つひには見つけれん、とせ
んすべなうおぼしこうずる也。「すべなう」は、俗にシカタガナイとい
ふ意也。

よのつねなるほどの云々

〔積〕末摘花のかたち尋常ならば思ひすてて止べきを、定かにわるきかた
ちをみては、我ならぬ人は必捨んと却てあはれにて、まめやかに音信給
ふ、と也。

ふるきのかはならぬ

〔積〕一句戯也。

おい人どもの

〔湖〕末摘の官女ども也。

かやうのまめやかごせ云々

〔湖〕こまやかに、内証の不自由なるを源のみつき給ふは、心ある者はは
づかしく思ふべけれど、末摘は何とも思ひ給はぬによりて、源も心やす
くて、さやうの方のうしろみして末摘をはぐくまんとおぼすなり。

さまことにならぬ云々

〔積〕「さまこと」には、よのつねの様には異なるよし也。「ならぬう
ちとけわざ」とは、普通にては無礼にてなしがたきやすだてのわざ、
といふ意也。内証の後見のみしてはぐくまんとおぼす故に、ほどを過た
る心安だての事もし給ふ、と也。末の巻々此姫君のさま、みな此意を貫
きてかかれたり。よく心得置てよむべし。

かのうつ蟬の云々

〔積〕「打とけたりしよひ」とは、暮打てありし時の事也。「そばめ」とは、
側より横に見たるかたちを云。

おとるべきほどの

〔積〕末摘花は、空蟬に劣るべきほどのかたちならんや、と也。旧注に、
ほどといふを分際の事とせられたるはわろし。ここはただくらべたるか
たちのほど也。下に「品」とあるが分際の事なり。

げにしなにもよらぬわざ也けり

〔拾〕帚木に「今はただ品にもよらじ」といへる所をふみてげにといへり。
〔積〕「品」とは、人品の分際の事也。末摘花は宮の御子なれど空蟬に劣
り給へるは、「女の用意は人品の分際にはよらぬもの也」と馬頭がいひ
しを思ひ出て、心得はて給へる也。かれ、なりけりといへり。

心ばせのなだらかに

〔積〕是より空蟬の事也。「ねたげなりし」とは、我心にしたがひはてずし
て心にくかりし、との意也。心ばせなだらかに用意ありて心にくかりし
を、つれなさに負てやみにける事よ、と物のついでごとにくちをしよう思
ひ出給ふ、と也。

評

此段、種姓尊くて心ばへもかたちもわるき人と、品賤く形はわるけ
れど用意深き女とをくらべて評じつつ、此巻の首に書出たる空蟬の脈を
結びたる首尾なり。心をつくべし。

まけて

〔拾〕「枉て」と見るべからず。「負て」也。

年もくれぬ

〔積〕源氏君十八の年くれたる也。さて次の事もなほ年内のことなり。

内の御とのゐ所

〔岷〕源の内裏におはする時の御とのゐ所、桐壺なるべし。

ふりにけるかしらの雪を見る人もおとらずぬらすあさの袖かな。

わかきものはかたちかくれず、と打ずじ給ひて、はなのいろにいで

て、いとさむしと見えつる御おもかげ、ふとおもひ出られて、ほほ

ゑまれ給ふ。頭中将にこれを見せたらん時、いかなる事をよそへい

はん、つねにうかがひくれれば、いま見つけられなん、とすべなうお

ぼす。よのつねなるほどの、ことなることなさならば、思ひすてて

もやみぬべきを、さだかに見給ひて後は、なかなかあはれにいみじ

くて、まめやかなるさまに、つねにおどづれ給ふ。ふるきのかはな

らぬきぬ、あや、わたなど、おい人どものきるべきものたくひ、

かのおきなのためまで、かみしもおぼしやりて、たてまつり給ふ。

かやうのまめやかごせも、はづかしげならぬを心やすく、さるかた

のうしろみにてはぐくまん、とおもほしとりて、さまことになら

ぬうちとけわざもし給ひけり。かのうつせみのうちとけたりし、よ

ひのそばめは、いとわろかりしかたちざまなれど、もてなしにかく

されて、くちをしうはあらざりきかし。おとるべきほどの人なりや

は。げにしなにもよらぬわざなりけり。心ばせのなだらかに、ねた

げなりしを、まけてやみにしかな、と物のをりごとにはおぼしい

づ年もくれぬ。内の御とのゐ所におはしますに、たいふの命婦ま

御けづりぐしなどには云々

〔**釈**〕源氏君の御くしけづりなどにつかひ給ふには、大輔、命婦は心かけ給へる人ならねば、けさうだつすぢなくて心安き物から、又をりをりは戯れなどものたまふ故に、いよいよ心やすく思ひ奉りて、めしなき時も申べき事あれば参る、と也。畢竟、戯れをいひ給ふ故に、心おきなく馴奉れる也。玉小櫛補遺に「けさうだつすぢなき故に、命婦が心やすき也」といへるはいかがあらん。文の主客まぎらはしく聞ゆ。

みづからのうれへは云々

〔**湖師**〕命婦が身上の愁などならば、たとへ恐れがましくとも先こそ申侍らめ、と也。

〔**釈**〕「うれへ」とは、ここは身上の事を祈る意にて、今の俗「ねがひ」といふにちかし。

ことこめたれば

〔**釈**〕言を籠ていひはなためさま也。

れいのえんなりと

〔**釈**〕例の「とは、上に」あまり色めいたりとおぼして云々」とありし脈にていへり。「艶なり」とは、色めきてヤウスブリする事也。

かの宮より侍る御文とて

〔**釈**〕源氏君のにくみ給ふ故に、命婦からうじて文を取出たるさま也。ましてこれは

〔**釈**〕いかなる事もかくすべきならぬに、ましてこれは我けさう人のふみなればとりかくすべきことかは、といひながら、文をとり給ふさま也。みちのくにがみ

〔**河**〕檀紙也。陸奥国より檀紙をすきはじめける也。古序に「みちのくのみゆみのかみ」といへり。檀はまゆみ也。

あつこえたる

〔**拾**〕厚肥たる也。いたくあつき紙は人のこえふとりたるに似たれば也。

いとようかきおほせたり

〔**湖**〕書得たる也。女の文をさのみしたたかにかきたるはわるきいましめ也。

〔**新**〕やうやうとして書とり得たるをいふ。歌の事を下に「これこそは手づからの御ことのかぎりなめれ」と有に合せてしらる。

うたも

〔**湖**〕歌も文のさまと同じとなり。

から衣きみが云々

〔**拾**〕から衣着る、とつづけたり。

〔**花**〕元真集、いつか我涙のつきんから衣君がころのつらきかぎりは

〔**湖師**〕源のとだえをうらむ泪に袖はかくぬれたり、と也。

心えず打かたふき給へるに

〔**細**〕袂はかくぞ」とあるは、別に何ぞそひたる物の有べきかと不審し給ふなり。

つつみにころもほこの

〔**河**〕袈裟、泥塗平具、衣笠、時絵、已上見延喜式。

〔**万**〕「つつみ」は泥絵、「衣はこ」は時絵にしたる也。

ついたちの御よそひ

〔**湖**〕元日の源の御装束とて態と進ぜられし、と也。

ひとりひきこめ侍らんも

〔**湖**〕命婦が方にとめ置侍らんも、未つむの御心ざしを空しくたがふるなれば、先源に見せまゐらせてこそ引こめし侍らめ、と也。

引こめられなんは

〔**釈**〕源氏君戯れての給ふ也。かくの如くよろしき物を引こめられんはいとからからん、と也。

袖まきほさん

〔**細**〕沫雪はけふはなふりそ白たへの袖まきほさん人もあらなくに

〔**拾**〕引歌は万葉第十有。

〔**湖師**〕源の御そでぬるるとも誰ほす人もなきに、末摘の御志はうれしき、と也。

ことにもいはれ給はず云々

〔**湖**〕源のあきれ給ふさま也。

〔**花**〕「くちつき」は末摘の歌の事也。

ぬれり。御けづりぐしなどには、けさうだつすぢなう、心やすきもイロケメクワケ

の、さすがにのたまひたはふれなどして、つかひならし給へれば、使 馴

めしなき時も、聞ゆべき事あるをりは、まうのぼりけり。命婦詞 あやしきキメウナ

ことを侍るを聞えさせざらんも、ひがひがしう思ひ給へわづらひて、マウシアゲ ハンチキニ

とほほゑみて聞えやらぬを、源詞 なにさまの事ぞ。われにはつつむことイヒカネル カクス

あらじとなん思ふ、とのたまへば、命婦詞 いかがは。アルマイ みづからのうれへは、△ツツミ侍る自 分

かしこくともまづこそは。これは聞えさせにくくなん、一ハンニ △聞王奉ラマ といたうこ言

とこめたれば、＊艶 れいのえんなり、イユ とにくみ給ふ。＊命婦詞 かのみやより侍るアチラヤル 末ツム

御ふみとて、＊源詞 とりいでたり。ましてこれはとりかくすべきことかは、命婦 陸奥国紙厚肥

とてとり給ふも、＊ むねつぶる。＊ みちのくにがみのあつこえたるに、＊

にほひばかりは、＊ ふかうしめ給へり。いとようかきおほせたり。う＊

たも、＊ 香 シマセ

から衣君が心のつらければたもとはかくぞそほぢつつのみ。＊源 心え＊

ずうちかたふき給へるに、＊ つつみに衣ばこのおもりに、古代 こだいな＊

るうちおきて、命婦詞 おしいでたり。これをいかでかはかたはらいたく思＊

ひ給へざらん。されどつ＊ いたちの御よそひとて、元日 わざと侍るめるを、△ソ

はしたなうはえかへし侍らず。＊ ひとりひきこめ侍らんも、独 人の御心＊

たがひ侍るべければ、＊ 御覽せさせてこそは、＊ と聞ゆれば、＊ ひきこめ＊

られなんは、＊ からかりなまし。＊ 袖まきほさん人もなき身に、いと＊

うれしき心ざしにこそは、＊ との給ひて、＊ ことに物いはれ給はず。源心 さ＊

これこそはつづから

〔釈〕これこそ末摘花の手づから物し給ひしわざのかぎりなるべし。さきに歌などよみ給へるは侍従など取直してものするやうに見えしが、実にさやうなりきと思ひ合せ給へるさまに書れたる也。湖月の師説いさかたがへり。なめれ、といひ、へかめれ、といふ辞をあちはひて考へしるべし。「事のかぎり」はわざの限にて、才芸のありたけといふ意なり。また筆のしりとるはかせぞ

〔賦〕侍従の外には又別に筆じり取てをしへ聞ゆる師ぞなかるべき、といふかひなくおぼす也。「筆のしりとる」とは、幼き人に手を教るさまによそへて戯れ書たる也。「はかせ」は師匠の事也。いとまかしこきかたとは

〔賦〕「かた」といふ語、穩かならず。諸抄にも其意を解れたるはなし。案にうたの誤なるべし。末摘花の心をつくしてよみ出給へるなれば、いともいともかしこき歌とは此歌をもいふべし、とて嘲り給ふ意也。さるは、昔よりいとかしこき歌などいひ伝へたる歌も多かるを思ひて、此歌も其ちやう也、との意也。ももじ心を付べし。今やう色のえゆるすまじく云々

〔釈〕一翁云、今様色は、当色ならぬ色目にて当時もてはやしたる間色をいへるなるべし。当色とは、位階につきて相当せる正色也。間色は、その当色ならぬはしたなる色也。花鳥に紅梅のこきをいふやうにあるは、ひがこと也。柏木巻に「黄がちなる今やう色」ともあれば、色は何にまれ、ただ其時々流行する色をいへる也。〔玉〕「えゆるすまじく」とは、かんにんのならぬほどといふこと也。〔賦〕今様色の直衣といふ中に、その古めきたるさまをこどわる例の文法なり。

〔玉〕「えゆるすまじく」とは、かんにんのならぬほどといふこと也。〔賦〕今様色の直衣といふ中に、その古めきたるさまをこどわる例の文法なり。うらうへひとじつ

〔釈〕「ひとしうこまやかなる」とは、裏も表も同じほどの地をもて仕立たるをいふ。「こまやか」は、織ぎまの事也。旧注に、色の同じきよしにどかれ、長沢氏は「まるの直衣也」といへれど、色の事は「つやなうふるめきたり」とあれば、其古めきたる色を「こまやか」とはいふべくもあらず。猶地の事とすべし。いとまほなほしう

〔賦〕「まほなほし」は凡俗めきたる意也。「つまづまぞまほなほしう見え

たる」といふべきを、打かへしていふは、例の文法也。一翁云、末摘よりまゐらせたる直衣の裁縫つたなくて、つまづまのしどけなきをいふ也。あさましとおほすに

〔賦〕此にもじ、穩ならぬやうなれど、誤とは見えず。此頃の一種のてにをはなるべし。手ならひすさび給ふを

〔賦〕「手ならひ」は用言也。「すさび」は、むだ書のやうにし給ふこと也。なつかしき云々

〔河〕万葉よそにのみ見つつかひんくれなるの末つむ花の色に出ずとも。古今へ人しれず思へばくるしくれなるのすゑつむ花の色にいでなん。新紅花は、一茎のうれに房ありて、其房の末にちひさく花の出るを摘故に、末つむ花とはいふなり。

〔細〕源氏後悔のひとり言なるべし。此歌によりて思へは、直衣は紅の間色なりしなるべし。さて意は、なつかしき色なき末つむ花を何に我袖にはふれけん、と也。「なつかしき色ともなし」は、紅色のなつかしからぬよしにはあらず、つやなう古めきたるをさせる也。色こき花と見しかとも

〔新〕これはかく書なしたるのみにて、古歌の詞によれるにはあらず。或説に、紅の色こき花と見しかども人をあくにはうつるてふなり、といふ歌有とて引たるは、古今集に、くれなるにせめし心もたのまれず、とあるを、上を作りてここにかなへんとしたる物也。〔賦〕此所、引歌ありげなる書きまなれど、河海に引れたるは、拾遺・新釈に弁へられたる如く、いとおぼつかなし。されば暫く新釈にしたがひて、ただ書なしたるばかりと定めつ。さて、いろこきはなど見しかども、さはあらずして、なつかしき色ともなし、と上へかへりて歌の詞にひびかせたる也。花に鼻をかねたるはもちろん也。かれ、命婦「はなのどがめを云々」と聞どがめたるなり。をりをりの月かけなどを

〔明〕岷是は命婦の事なるべし。源氏は月影ならで礎に見給ふ也。命婦こそ時々月かけなどにはかり見参らせたる事なれと覺えたり。前に「物ごしにてかたらひ侍り」と有。又「此頃の朧月夜に、しのびて物せん」ともあり。かやうの時々はかり命婦は見参らすべし。〔湖〕思ひ合する折々の月かげなどを」とよみつづけて、命婦が見参らせたりの明星の御説にしたがふべし。くれなるの云々

〔新〕かの衣と源の御歌をもととして、末摘に御心はあさくとも、さるかたはにはおはする名をたてざらんやうに、と願ふなり。是ぞ前におほつかなくてやみなんとさへ思へる命婦がまこと也。源もとより心々るしうおぼす上に、此歌の心にしたがひ給ふこと、次にかけり。〔釈〕「ひとほな」は染色の事にて、ただ一しほばかり染たる浅き色をいふ。委しくは余釈にいへり。さて色の浅きを、ただ一時の志にたとへたり。「うすくとも」は色のうすくとも也。「くたす」は腐す也。末に「うれしからん」などの意をふくめたり。さて此歌にて、かの直衣は紅の今やう色といふ事、明らかにしられたり。

てもあさましのくちつきや。これこそは、てづからの御ことのかぎ

りなめれ。侍従こそはとりなほすべかめれ。また筆のしりとるはか

せぞなかるべき、といふかひなくおぼす。心をつくしてよみ出給へ

んほどをおぼすに、いともかしこきかたとは、これをもいふべかり

けり、とほゑみて見給ふを、命婦おもてあかみて見奉る。いまや

う色の、えゆるすまじくつやなうふるめきたるなほしの、うらうへ

ひとしうこまやかなる、いとまほなほしう、つまづまぞみえたる、

あさましとおほすに、此文をひろげながらはしに手ならひすさび給

ふを、そばめに見れば、

なつかしき色ともなしになににこのすゑつむ花を袖にふれけん。

色こきはなど見しかどもなど、かきけがし給ふ。はなのどがめを、

なほあるやうあらん、と思ひあはするをりをりのつきかげなどを、

いとほしき物から、をかしうおもひなりぬ。

くれなゐのひとはな衣うすくともひたすらくたす名をしたてず

心くるしのよや

●世は男女のなからひを思ひて、ただ世間の事にいひなしたる也。

よきにはあらねと云々

●いとよきはあらねど、末摘花の此命婦ばかりのかいなでにだにおはしなば、せめてはよからん、とおぼす也。「かいなで」は「箏より出たる詞也」と箋に見えたり。さもあらんか。ただおしなべたる普通の意なり。人のほどの心くるしきに

●「人のほど」とは、末摘花の品たかきをいふ。品たかき人の名のくちなんはさすがにいとほし、と命婦の心をうべなひ給へる意なり。人々まゐればとりかくさんや

●かくいふうち他に人々御前へ参りし也。「とりかくさんや」とは、命婦にとりかくせといひつけ給ふ意を、かくゆるめて談合するやうにのたまふ意と聞えたり。かかるわざは

●「人のする物にや」とは、かかるつきなきわざは惣じて世間の人もする事かといたくがめ給ふ意也。

●何故に此衣を御覧に入つらん、と命婦が後悔する也。やをらおりぬ

●はづかしき故に、ひそかに御前を下て立かへりし也。

●またの日うへに侍らへば
●禁中の台盤所に命婦のさふらふ也。台盤所は女房の侍ふ所也。くはや

●拾字拾遺には、只「くは」とも「くはくは」ともあり。

●玉補「是はや」の意なるべし。すはやはそはや、す奴もそやつならん、と思はるる故也。さてここにての意、俗にそりやといふ詞のごとし。あやしく心ばみ過ぎる

●これはあやしく心づかひせらるると、源氏君みづからのうへをのたまふ戯言也。けさうぶみの返事は、心ばへを見せてをかしう書べきわざなるを、きのふ末摘花の歌、手づつなりければ、あやしきかたに心ばみの過ぎるる事よ、と戯れてのたまふ也。諸抄、末摘のおくり物さし過たりとおぼしたるやうにあるは、いみじきひがごと也。

女房たち

●^{*}こころぐるしのよや、^{*}といたうなれてひとりごつを、^{*}よきにはは。^{*}
△泰カラノオキノドクナ
△オキノドクナ
モソナレ
独
言

あらねど、かうやうのかいなでにだにあらましかば、と返々くちを
ツウレイ
デモ
△ヨカラマシ

●^{*}人のほどの心くるしきに、^{*}名のくちなんはさすがなり。^{*}人々参し。^{*}
クラキ
キノドクサ
朽

れば、とりかくさんや。^{*}かかるわざは人のするものにやあらん、と
源詞

打うめき給ふ。^{*}なになに御覧せさせつらん。我さへ心なきやうに、と
ムツガリ
命婦心
マデ
△オホサシ

いとほづかしくて、^{*}やをらおりぬ。^{*}又の日うへにさぶらへば、だい
ソツト
下
ツギ
侍

ばん所にさしのぞき給ひて、^{*}くはや、^{*}きのふのかへり事、あやしく
盤
源
ソリヤ
昨
日
返
△ヒヨシナゲニ

心ばみすぐさるる、とてなげ給へり。^{*}女房たち、何事ならんとゆか
キドリ
△ハセ
△文ヲ
投タシ

しがる。^{*}たたらめの花のいろごと、^{*}みかさの山のとめをばすてて、
源
本
うめ

とうたひすさびて出給ひぬるを、^{*}命婦はいとをかしとおもふ。^{*}心し
イテナシ
イなほ
命婦

●岷 台盤所にさふらふ女房たちなり。

たたらめの花の

●玉 これは「たたらめの花の」と有しを、此名聞なれぬ故に、らをうの誤ならんと思ひて、さかしらに改めつるなるべし。「たたらめ」を、「梅」とかへてうたふべきよしもなきうへに、「ただ」といふ事も穩ならざるをや。注に「たたらめの花」といふは、『たたむめの花』といへるを書誤れるなるべし」とあるは、いみじきひがごと也。新撰字鏡に「華太々良女」と見え、内膳式には「多々良比売花」と見え、後の書どもには「たたらべ」ともあり。風俗歌、花鳥に引給へることし。これもかのたたらめの歌の末にある詞にや。かの歌、政事要略に載たるを、今考るに、花鳥に引給へることくにて、末は見えず。なほよく尋ぬべし。

●花 政事要略・衛門府風俗歌云「多々良女乃花乃如加以彌利好牟夜滅紫乃色好牟夜」
●「たたらめの花の事、玉小櫛にて明らかなり。さて花鳥に引給へる風俗歌、本には滅紫とありてケシムラサキとよめり。されどこはかいねりに対へたるなれば、必滅紫にて、色の浅く赤きかたなるべしと云。伴氏の説によりて今改めつ。猶余釈にいふべし。

●河 求子の歌也。春日社にてはみかさの山とうたふ。余社にては各其所をうたふ也云々。

●細 此心は、源の心中に常陸宮のをとめとうたひたく思ひ給ふ也。鼻の色を思ひてのたまふ也。

●湖 宗祇云「かいねりは色紅なり。末つむの鼻の赤きをいはんため也。末摘は常陸宮の姫君なれば、先「三笠山のをとめ」とはのたまふなり云々」ここに「三笠の山の」といふ事は、春日明神はひたちより出給ひたる御神也、三笠も春日も出給ひし御神の社なれば、そのたよりあるによりかくいふ也。師説の密伝也。

●諸抄の説ども、いづれもあたりとは聞えがたきにや。其中に、鹿島と春日と同じ御神なればといふことは少しよせありて聞ゆれども、なほいと迂遠き説めきたり。案に、花鳥に引給へる風俗歌の末の詞などなりしを、今は失ひてしらぬやうになれりしにもあらんか。但し「つづしり歌」とあるは、多々良女に求子をつぎて歌ひ給へるをいふ意かともおぼゆれば、なほ別にさる故ある事にや。よく考へてさだむべし。さてたたらめの花の色のごとく朱き鼻のをとめをばすてて、といふ意を、このうたひ物の詞によせてうたひらせ給ふ意とは聞えたり。

●命婦はいとをかしと思ふ

●命婦は歌の心をひそかにしりてをかしと思ふ也。

●心しらぬ人々は
●その心を得ぬ女房たちは、御ひとりゑみは何の故ぞと命婦にどがめてどふなり。

●あらず寒き霜朝に

●命婦がこたへていふ也。「あらず」は、「さにはあらず」といふ意を約めていへる也。この寒き霜のあしたに、かの風俗歌に「かいねりこのむ」といふらんかいねりのごとく、鼻のさきの赤くなりたる色あひや見えつらん、さてぞ源氏君はつづしり歌にうたひ給ひしなるべき、いとをかし、といひことわる也。寒きに鼻の色づくを、花にかけたることはもちろん也。

かいねりこのめる

〔釈〕撞練のかいは例の発語にて、練たる絹の名なりしを、転りては火色ヒロイロの染色をさして撞練ツクレンといへり。この風俗歌なるも染色をさしていへる也。委くは余釈にいふを見るべし。さてここに「このめる」といへるは、ただかの歌の詞によりたるまでにて、別に意はなし。かいねりのやうに、はなの色づきたる事とのみ見るべし。

御つづしり歌の

〔釈〕歌をきれぎれにうたふ事にて、今俗「はな歌」といふに近く聞ゆ。尋木にも有。旧注其はひがこと也。

あながちなる御事かな

〔釈〕他の女房たちの詞也。それはあながちにの給ふといふもの也、ともどく也。「此中に」とは、此人々の中には、との意也。「にほへるはなも」とは、しか赤き鼻もなし、と也。例の花をおもへる故に、「にほへる」とはいへる也。

左近の命婦肥後の采女や

〔釈〕此二人の女房、かねて鼻赤き人と評判あるさまにかきなしたる也。さる人やまじりて有つらんなど、かの末摘花の事を心得ねば、おのおのいひしるふ也。

御かへり奉りたれば

〔湖〕命婦、源の御返事を末摘へ奉りたるなり。宮には女房つとひて

〔岷〕末つむのかたの人々、よりに見る也。

あはぬ夜を云々

〔花〕拾遺衣だに中にありしはうとかりきあはぬ夜をさへへだてつるかな玉下句は、かの末摘花よりおくり給へる衣の事にてよみ給へる也。逢ぬ夜をへだつる衣のあるうへに、いとどこれをかさねて見よとや、といへるにて、いよいよ重ねてへだてんとや、の意也。

〔釈〕花鳥に引給へる拾遺集の歌の詞を用ゐてしたてたる也。「逢ぬ夜をかさねて」といふ語脈なり。結句は「相見よとや」の意にて、たがひに見るをかくいふなるべし。源注拾遺に、花鳥説の「我も見ん」とあるをどがめたるはさる事なれど、「我にねんごろに見よとてや云々」といへるは又たがへり。すてかい給へるしもぞ

き霜あさに、朝かいねりこのめるはなの色あひや見えつらん。御つづハナ

しり歌のいとをかしき、といへば、あながちなる御事かな。このなウタ女房たち詞ムリヤリ入々々

かには、にほへるはなもなンかめり。左近の命婦、ひごのうねめやま肥後

じらひつらんなど、心もえずいひしるふ。御かへりたてまつりたれ交アフ

ば、みやには女房つどひて見めでけり。ヒタチノ宮集賞

あはぬ夜をへだつる中の衣手にかさねていとど見もし見よとや。*源

しろきかみにすてかい給へるしもぞ、中々をかしげなる。つごもり白紙

の日夕つかた、かの御衣はこに、御れうとて人の奉れつる御そ料ひと衣一

ぐ、えびぞめのおり物の御そ、又山吹かなにぞ、色々みえて、命婦具葡萄染織衣

ぞ奉りたる。ありしいろあひをわろしとや見給へる、と思ひしらるイ給ひけん命婦

れど、かれはたくれなモマタあのおもおもしろしをや。さりともきえじ、重々

とねび人どもはさだむる。御歌もこれよりのは、ことわり聞えてしトシヨリ末ツムリクツツシ

たたかにごそあれ。御かへりはただをかしきかたにごそなど、くちツカリトフウリウナアレ口

ぐちにいふ。姫君もおぼろげタイテイノコトならで、し出給へるわざなれば、物に々

かきつけておき給へりけり◎ついたちのほどすぎて、ことしを元日とコこ男

だうかあるべければ、れいの所々あそびののしり給ふに、物さわが踏歌

〔湖〕命婦が心也。末摘のおくり給ふをもどきて源の是を奉り給ふか、と也。かれはたくれなるの

男踏歌

〔湖〕年始の祝言の歌うたひ、舞をかなでて、所々へめぐりありく事也。

〔岷〕毎年におこなはれぬ故に「ことしは」といへり。御踏歌は毎年正月十六日也。

〔花〕男踏歌は正月十四日の事也。初音巻に委くするすべし。

例の所々あそびののしり給ふ

〔岷〕然るべき人々も男踏歌には出給ふ也。仍て打ならしの所々にあるき給ふなり。

なぬかの日の節会

〔白馬節会也。〕

〔弄〕白馬、其頃はひるおこなはれたるなるべし。

〔白馬、いにしへは青馬を進りしなり故に、白馬とかきてもなほ「あをうまのせちゑ」といへり。天皇馬寮よりひき遣らす白馬を御覧じて、群臣に宴を賜ふ儀式也。陽氣を助くる為なりとぞ。委しくは余釈にいへり。御とのる所〕

〔湖〕きりつぽ也。そよめぎ

〔玉補〕ここにてはにぎやかなる心と聞ゆ。

〔積〕「よづいたり」と有も、ここは世間なみになりたる意と聞ゆ。源氏より御贈物などありし故なるべし。君もすこしたをやぎ給へる

〔積〕姫君も少したをやかになり給へるけしきをもてつけ給ふ、と也。「たをやぎ」は「和らぎ」といふがごとし。初の埋れいたきにくらべて、「少したをやぎ」とはいへる也。いかにぞあらためて

〔積〕「ひきかへたらん時、いかにぞ」といふ意を打かへしたるは例也。〔末摘の心も形もあらたまりたらばいかならん、と源の心に思ひ給ふ也。年のあらたまりたると又衣装などのかはりて、ちと見なほしたるにて、かやうにおもひ給ふ也。やすらひなして

〔湖〕帰りかね給ふやうにしなし給ふ也。うへもなく

〔岷〕屋ねなども板間がちなる也。

〔湖〕廊のやねもなきさま也。

〔雪〕すこし降たる光に

〔積〕雪に日の映じたる也。かたはらふし

〔岷〕少しかたふきかかり、物によりかかりなどしたる体也。

おひなほりを

〔岷〕源の心に、様体を見なほし給ひて、もしかたちなどもなほりては、と思ひ給ふ也。

〔積〕上に「あらためて引かへたらん時」とありし脈也。かうし引あげ給へり

〔細〕上下つづきたる長き格子なるべし。今の紫宸殿などの如く也。それは内の方へあぐる也。

〔孟〕この格子も長きしとみなるべし。いとほしかりし物ごりに

〔積〕さきに末摘花のかたちのわろきを見あらはして、いとほしかりしにこり給ひて、格子をのこらす上もはて給はぬ也。「をかしかりし」とある本はわるし。しかいふべき所にあらず。けうそくをおしよせて

〔弄〕長きみかうしを引かけ給ふなるべし。上下つづきたるを脇息によせかけん事、たより有べき歟。但分明ならず云々。

〔積〕格子を上げずして、脇息を格子のほどりへおしよせて、上かけたる格子をその脇息へ打かけて、外のみかりをひきて鬢ぐきをつくるひ給ふなり。孟津いささかたがへり。きやうだいかくしけ

〔河〕鏡台・唐匣・搔上函・搔鬢之具足入タル物也。

〔細〕かやうの御具足は故宮の御物なるべし。

〔積〕拾遺に和名抄を引れど、今略く。これらの函は類聚雜要抄に見ゆ。とり出たり

〔湖〕女房逢取出たるべし。されてをかしと見給ふ

〔積〕かかる心つきなき御すまひに、男の調度などはあるまじきを、案外に有しを見て、ほどよりはざれたるとおぼす也。ありしはこの心はへを

〔細〕ふるとしに源より奉られし衣裳をそのまますなり。

〔積〕「心ばへ」は「心ぎし」といはんが如し。

〔湖〕源氏より奉り給ひし装束を、そのまま末摘のめしたるとも源氏はおぼしよらざりし也。けうあるもんつきて

〔湖〕興ある紋のけやけきにつきて、あやしく源の奉り給へるに似たりと、源の心をつけ給へる也。

しけれど、さびしき所の、あはれにおぼしやられるれば、なぬかの日ヒタチノ宮

のせちゑはてて、夜にいりて御前よりまかで給ひけるを、御とのみ帝ノ源

どころに、やがてとまり給ひぬるやうにて、夜ふかしておはしたり。所 スグニ △末ノ方△

れいの有さまよりは、けはひうちそよめきてよづいたり。君もすこイッモ ヤウス イテナシ 世付 末ツム

したをやぎ給へるけしき、もてつけ給へり。いかにぞ、あらためて+ ヤハラギ イハナシ イハナシ

ひきかへたらん時、とぞおぼしつづけらるる。日さしいづるほどに、イハナシ

やすらひなして出給ふ。東のつまどおしあけたれば、むかひたるら踏 踏 妻 戸 向

うの、うへもなくあばれたれば、日のあしほどなくさしいりて、雪上 荒 脚

すこしふりたるひかりに、いとけざやかに見いれらる。御なほしなキツパリト △源ニ直衣

ど奉るを、見いだして、すこしさしいでて、かたはらふし給へるか△末△ 傍 臥

しらつき、こぼれ出たるほどめでたし。おひなほりを見いでたらん頭 △髪△ アンバイ 生 直

時、とおぼされて、かうしひきあげ給へり。いとほしかりし物ごりに、△イカナラン 上 イをかし 慥

あげもはて給はで、けうそくをおしよせて、うちかけて、御びんぐ上 テモシマイ △格子ヲ 鬢 茎

きのしどけなきをつくろひ給ふ。わりなうふるめいたるきやうだい、ミダレタル ワケモナク 古 ＊鏡 台

からくしげ、かかげのはこなど、とりいでたり。さすがにをとこの唐 櫛 匣 搔 上 函 末ツム

御ぐさへ、ほのぼのあるを、されてをかしと見給ふ。女の御さうぞく、テラチラ シヤレ

けふはよづきたりとみゆるは、ありしはこのころばへを、さなが根本ウチの 宮 ソノマ

らなりけり。さもおぼしよらず、けうあるもんつきて、しるきうはマ △源△ イロ 表

ぎばかりぞ、あやしとはおぼしける。ことしだに、こゑすこしきか着 源詞 今年 声 少

またるる物はさしおかれて

〔河〕拾遺「あら玉の年立かへるあしたよりまたるる物はうぐひすの声
〔積〕鶯のこゑよりは、先末摘花の御けしきのあらたまりて、物いひ給は
ん声のゆかしき」と也。

さへする春はと

〔河〕古今「もも千鳥さへづる春は物ごとにあたたまれどもわれぞふりゆく
〔積〕「あたたまらん」とあるにつけて、此歌の詞をいひ出給へる也。「わ
ななかし出たり」は、はづかしきに声のふるひたるさま也。

〔岷〕「われぞふりゆく」といふ心をのべ給へる末摘の詞也。卑下しての
たまふ也。

さりや年へぬるしよ

〔積〕「さりや」は然有といふことにて、やはいひすてのや也。「われぞふ
りゆく」といふをうけて、然有、しか物のたまふも年を経ぬる駭ぞ、と
てわらひ給ふ也。

夢かどぞ見ると

〔河〕「忘れてはゆめかどぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見ん」とは伊勢
物語

〔積〕此歌の「思ふ」とあるを「見る」とかへて引れたるは、例のここに
かなへんとてのたくみ也。「翁云、「ゆきふみわけて」といふ詞を、け
ふの雪のけしきにははせたる也」といへり。奥人に引れたる歌はさら
にかなはず、ひがこと也。

かたおひ

〔拾〕万葉第九云、「八年児之片生之時從云」。この物語末には「かたなり」
ともいへり。

〔岷〕おひととのほらねども、うつくしきしたぢといふ也。

紅はかうなつかしきも

〔花〕「くれなる」は紅顔をいふ也。

〔積〕紅顔といふまでもあらず、ただうつくしきたとへのみなり。さるは、
末摘花を紅にたとへたるにくらべていへる也。「きぬの事也」といふ説は、
すべてあたらす。

むものさくらのほそなが

〔河〕桜色は、一面はうすく、裏はこき蘇芳也。「ほそなが」は、幼少の貴女
の着する物也。

〔積〕「無紋」とは、地に何の形もなきをいふ。「細長」は、かりぎぬのく

古代のおは君の御なごりにて云々

〔新〕「古代」は、男にあふほどにならでは齒黒せざりけん故に、古代の
おは君の心掟の残りて、十二ばかりになれども猶黒めんことはいまだし
きことと少納言などはいへど、猶とてせさせ給へり、といふなるべし。

〔積〕右新釈の説、「少納言などはいへど」とあるは文外のよしなしことな
れど、其外はよろしげ也。「引つくるはせ」とは、鉄漿をつけさせ奉りて、
形を引つくるはせ給へる也。岷江の或抄に、祖母君の服なりし故おそな
はりたるやうにいへるは、ひがこと也。さては「古代の」といふ事、い
たづらなり。又長沢氏は、「こは齒をそめしにはあらで、齒黒の具もて
簾をひきたるなるべし」といへれど、「齒黒」とあるを打まかせてさは
いひがたし。案に、齒を染ると簾をひくとは、必同時にせしなるべし。
さらでは次の文聞えがたし。又新釈に、「齒黒めの後、ぼぼうまゆの常
のまゆになりたるをいふ」とあるは、うらうへのひが事也。

心からなかうつきよを云々

〔岷〕このうつくしき紫上ばかりを見て居すして、なぜによせ思ひあつか
ふぞ、と也。

〔積〕諸注の中に此説よろし。「心ぐるしきもの」といふを末摘花と見たる
説どもはわるし。ここは二条院へかへりて、紫上のうつくしきに見くら
べて、末摘花の事を後悔し給ふことをいへる所なれば、「心ぐるしきもの」
は必紫上ならではかなひがたし。「うきよを見あつかふ」とあるが末摘
花の事也。「うき世」とは、「世」は例の男女の縁の事、「うき」は心に
かなはずして憂はしき意也。「あつかふ」は、取あつかひて苦勞するを
いふ。さて「心ぐるしき」は、気にかかりて心のくるしく思はるるにて、
雅語訳解にイタイタシイと訳したる方の意なり。

かみいと長き女を

〔積〕末摘花のかたちをかき給ふなり。

あかばなを

〔積〕「あかばな」は紅花にて、即紅粉の事なるべし。俗に藍バナなどいふ語をも思ふべし。紅粉を筆にてかきつけ給ふなり。これを赤鼻と説た
る注どもはわるし。さては「かきつけ」といふ事聞えがたし。

せ給へかし。〔またるるものはさしおかれて、御けしきのあらたま

らんなんゆかしき、とのたまへば、〔さへづる春は、とからうじて

わななかしいでたり。〔さりや。としへぬるしるしよ、と打わらひ給

ひて、〔夢かどぞみる、とうちずじていで給ふを、見おくりてそひ

ふし給へり。くちおほひのそばめより、なほかのすゑつむ花、いと

にほひやかにさし出たり。みぐるしのわざやとおぼさる二条院に

おはしたれば、むらさきの君、いともうつくしきかたおひにて、く

れなぬは、かうなつかしきもありけり、と見ゆるに、むものさく

らのほそなが、なよよかにきなして、なに心もなくてもものし給ふさ

ま、いみじうらうたし。こだいのおは君の御なごりにて、はぐるめ

もまだしかりけるを、ひきつくろはせ給へれば、まゆのけざやかに

なりたるも、うつくしうきよらなり。心からなかうつき世を見あ

つかふらん。かく心ぐるしき物をも、みてあたらで、とおぼしつづ

れいのもろともにひいなあそびし給ふ。ゑなどかきていろどり給ふ。

よろづにをかしうすさびちらし給ひけり。われもかきそへ給ふ。か

みいとながき女をかき給ひて、はなにべにつけて見給ふに、かた

にかきてもみまうきさましたり。わが御かげのきやうだいにうつれ

るが、いとよらなるを見給ひて、てづから此あかばなをかきつけ、

さてまじれらんは

〔釈〕さてといふ事、一本によりて補ひつ。
〔湖〕よき顔にも、あかき鼻のかくまじれるは見苦しからん、と也。

さもやしみつかんと

〔釈〕つけたる紅粉のさながらに染着んかと、紫上の危ぶみ給ふなり。
空のごひをして云々

〔釈〕のごふまねをして也。「用なきすさび」は、いたづらなるなぐさみといふ意也。

御すずりのかめの水にみちのくにがみをぬらして

〔釈〕此句落たる本あり。今河海に引れたる本、又一本によりて補ひつ。「硯の瓶」は、今水いれといふもの事也。此句より平仲を出し来れり。味はふべし。

へいちうがやうに云々

〔河〕「平仲」は、平貞文が字也。女にことに心ざしあるけしきを見えんとて、硯の瓶に水を入れてもちて、目をぬらしてなくよしをしけり。女心得て、墨をすりて入たりけるをしらで、れいのやうにかほにつけてかへりたるを見て、家なる女のよみける。〔我にこそつらさは君が見すれども人にすみつく顔のけしきよ〕宇治大納言物語

〔釈〕平仲がごとく墨にて色どりそへ給ふな、との意也。そへとは、赤きうへに墨を也。

あかからんはあへなん

〔拾〕敢は堪と心かよひて聞ゆれば、赤きは猶堪忍すべし、黒く色どりなし給はは見ぐるしさまさりてたへがたし、と也云々。

いもせ

〔釈〕夫婦といふほどのこと也。

うららか
〔拾〕「遅々」を「うらうら」とよめり。後のうを略して「うらら」といふ。かは、うらやかといふ心にそへたる也。

ほほゑみわたれる

〔釈〕花の開くを人のゑむにたとへていへる詞にて、もろこし人もいへり。花鳥の案笑梅の事は、余釈に弁へたるがごとし。不用なればここに載ず。はしがくし

〔花〕仁和、芹川行幸次幸二八条院。為ノ作ノ寄ノ御興ノ之便、初造階隠云々。見ノ吏部王記天慶六年也。今案、南階の間にはしらをニツたててうへをふきいだすを「はしがくし」といふ。鳳輦をひんがしむきにかきすゑて、左のわきより乗御下御あらんため也。

くれなるの云々

〔釈〕上の句は、紅梅の色につきて末摘花の形を思ひ出つうとみし給ふ心あらはなり。下句は、ただ梅の事のみにはあらず、末摘花の種姓はよろしくなつかしけれど、といふ意をそへたるべし。さらではただ梅の歌となりて、いたづら也。諸注此意を説れざるはいかが。

いでやとあいなく云々

〔釈〕紅梅の花より末摘花を思ひいでて、あいなく打うめかれ給ふ也。此巻は末摘花の事を語るが主なれば、この事をもて終られたり。結局心ありといふべし。

あないとほし

〔釈〕花鳥に引れたる本、又万水一露本などによりて補へり。此句なき本どもはうつし落せる也。末摘花のひたすら思ひおとされ給ふを、作者のたすけあはれびたる詞にて、かならず有べき所也。

かかる人々のすゑずゑ

〔釈〕「かかる人々」とは、末摘花はいふもさら也、空蟬・軒端萩などにわたりていへりと聞えたり。これを紫上と末摘花といへる注は、かなひがたし。ここは空蟬・末摘花などの事をしばらくたちきりて、他の物語にうつるべき結構なれば、かくいひてとぢめたる、いと心ふかし。紫上は次の巻々にも絶ずむねとかかれたれば、かくおぼめきていふへくはあらず。よくよく思ふべし。さてかくいひとぢめおきて、はるかに須磨のうつろひの後に蓬生・閨屋の二巻をあらはされたる、いといと心ふかくめつらか也。かの巻々につきて心得べし。

にほはして見給ふに、かくよきかほだに、＊イさてナンさてまじれらんは、みぐ交

アカクシテテサヘるしかるべかりけり。姫君見て、紫いみじくわらひ給ふ。まろがかく源詞

かたはになりなん時いかならん、との給へば、紫詞うたてこそあらめとワルウ

て、＊さもやしみつかん、とあやふくおもひ給へり。そらのごひをし＊源

て、詞さらにこそしろまね。ようなきすさびわざなりや。うちにか白

にのたまはんとすらん、真実いとまめやかにの給ふを、いといとほし紫

とおぼして、＊よりて、御硯のかめの水に、みちの国がみをぬらして、タチヨリテ

のごひ給へば、＊平へいちうがやうに、いろどりそへ給ふな。あかから仲

んはあへなん、＊とたはぶれ給ふさま、いとをかしきいもせと見え給堪

へり。日＊のいとうららかなるに、いつしかとかすみわたれるこずゑ遅々

づきにけり。＊

どもの、心もとなき中にも、梅はけしきばみほゑみわたれる、とマチトホナル

りわきて見ゆ。はしがくし＊のもの紅梅、いととくさく花にて、色キモチヲミセ

クベツニ階づきにけり。＊

くれなる＊源の花ぞあやなくうとまるる梅のたちえはなつかしけれワケナク

ど。いでや、とあいなく＊うちうめかれ給ふ。あないとほし。かかる＊

人々のすゑずゑ、いかなりけん。＊

い＊でや、とあいなくうちうめかれ給ふ。あないとほし。かかる＊

人々のすゑずゑ、いかなりけん。＊